

**【表紙】**

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	令和8年6月19日
【事業年度】	第31期（自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日）
【会社名】	株式会社ヒップ
【英訳名】	HIP CORPORATION
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 田中 伸明
【本店の所在の場所】	神奈川県横浜市西区楠町8番地8
【電話番号】	(045)328-1000
【事務連絡者氏名】	執行役員 総務部長 東出 貴智
【最寄りの連絡場所】	神奈川県横浜市西区楠町8番地8
【電話番号】	(045)328-1000
【事務連絡者氏名】	執行役員 総務部長 東出 貴智
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

## 第一部【企業情報】

## 第1【企業の概況】

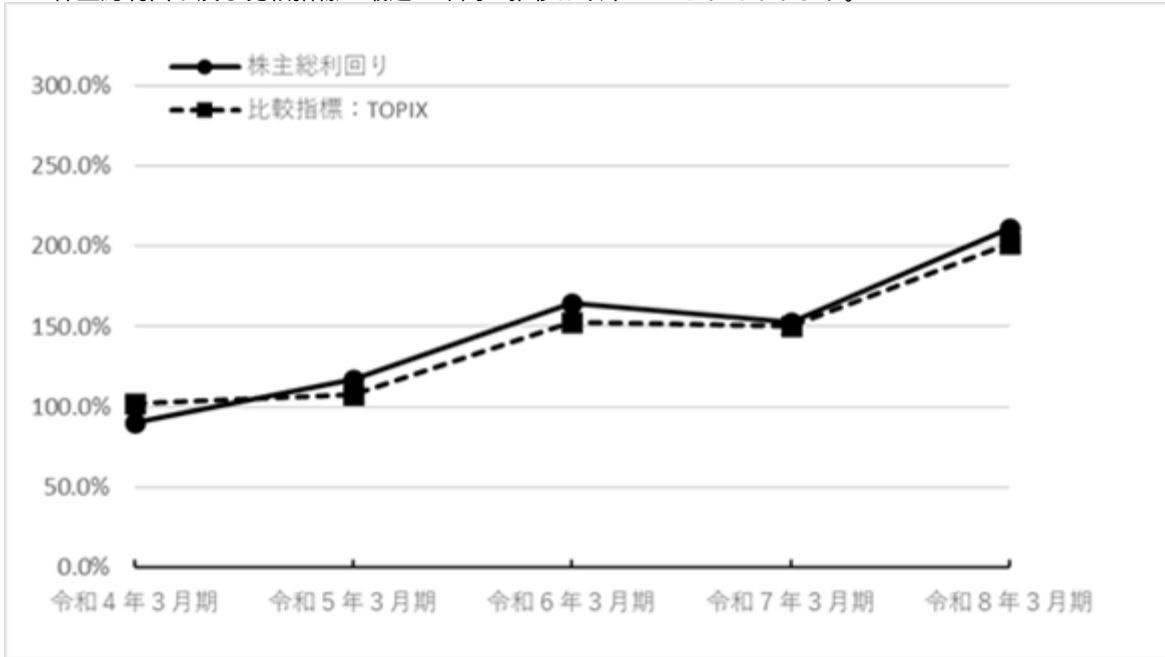
## 1【主要な経営指標等の推移】

提出会社の経営指標等

回次	第27期	第28期	第29期	第30期	第31期
決算年月	令和4年3月	令和5年3月	令和6年3月	令和7年3月	令和8年3月
売上高 (千円)	5,188,579	5,475,278	5,660,130	5,969,419	6,193,609
経常利益 (千円)	587,935	592,281	550,939	564,414	580,228
当期純利益 (千円)	403,595	401,538	388,586	413,669	432,752
持分法を適用した場合の投資利益 (千円)	-	-	-	-	-
資本金 (千円)	377,525	377,525	377,525	377,525	377,525
発行済株式総数 (株)	3,975,300	3,975,300	3,975,300	3,975,300	3,975,300
純資産額 (千円)	3,352,709	3,634,991	3,810,570	3,979,882	4,076,911
総資産額 (千円)	5,585,679	5,768,040	6,144,020	5,904,654	5,701,169
1株当たり純資産額 (円)	843.41	914.42	969.56	1,024.37	1,071.41
1株当たり配当額 (円)	30	40	50	54	70
(うち1株当たり中間配当額)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純利益 (円)	101.53	101.01	97.91	105.73	112.03
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	60.0	63.0	62.0	67.4	71.5
自己資本利益率 (%)	12.6	11.5	10.4	10.6	10.7
株価収益率 (倍)	6.97	8.83	12.56	10.19	13.29
配当性向 (%)	29.5	39.6	51.1	51.1	62.5
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	560,000	344,756	549,417	217,540	483,352
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	7,746	4,463	1,706	95,169	603,825
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	120,272	170,082	214,645	444,899	735,775
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	3,248,835	3,419,047	3,755,526	3,432,998	2,576,749
従業員数 (人)	798	804	819	844	855
株主総利回り (%)	90.1	117.5	164.8	152.7	211.6
(比較指標：TOPIX(東証株価指数)(配当込み)) (%)	(102.0)	(107.9)	(152.5)	(150.2)	(202.2)
最高株価 (円)	955	904	1,514	1,260	1,661
最低株価 (円)	700	696	844	856	895

- (注) 1. 当社は連結財務諸表を作成しておりませんので、連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移については、記載しておりません。
2. 持分法を適用した場合の投資利益については、関連会社がないため記載しておりません。
3. 令和8年3月期の1株当たり配当額70円については、令和8年6月26日開催予定の定時株主総会の決議事項となっております。
4. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

- 5．最高株価及び最低株価は、令和4年4月4日より東京証券取引所スタンダード市場におけるものであり、それ以前については東京証券取引所JASDAQ（スタンダード）におけるものであります。
- 6．株主総利回り及び比較指標の最近5年間の推移は以下のとおりであります。



## 2【沿革】

年月	事項
平成7年9月	神奈川県横浜市西区に株式会社ヒップ設立、アウトソーシング事業を開始
平成8年9月	愛知県名古屋市中村区に名古屋営業所を新設
平成9年4月	東京都渋谷区に東京営業所を新設
平成10年2月	神奈川県横浜市西区に横浜営業所を新設
平成10年10月	大阪府大阪市北区に大阪営業所を新設
平成11年12月	神奈川県横浜市港北区に新横浜テクノセンターを新設し、機械設計部、システム設計部を設置
平成12年2月	神奈川県藤沢市に独身寮（藤沢寮）を購入
平成13年7月	静岡県沼津市に沼津営業所を新設
平成13年9月	新横浜テクノセンターに電子設計部を設置
平成14年9月	埼玉県さいたま市に大宮営業所を新設
平成15年9月	兵庫県神戸市中央区に神戸営業所を新設
平成16年8月	京都府京都市下京区に京都営業所を新設
平成16年9月	静岡県浜松市にサテライト浜松を新設
平成16年11月	栃木県宇都宮市にサテライト宇都宮を新設
平成16年12月	福岡県福岡市博多区にサテライト福岡を新設
平成17年6月	宮城県仙台市青葉区に仙台営業所を新設
平成17年7月	サテライト福岡を福岡営業所に昇格
平成17年10月	ＣＴ事業部を新設（機械設計部、システム開発部、電子設計部を集約）
平成17年11月	サテライト宇都宮を宇都宮営業所に昇格
平成18年7月	愛知県安城市に独身寮（エスポワール・安城）を竣工
平成18年12月	ジャスダック証券取引所に株式を上場
平成19年4月	兵庫県三田市に社員寮（プル・ミエール三田）を購入
平成19年10月	サテライト浜松を浜松営業所に昇格
平成20年3月	神奈川県横浜市に社員寮（グランディール片倉）を購入
平成20年10月	神奈川県横浜市西区に本社ビルを購入し移転
平成20年11月	横浜営業所、ＣＴ事業部を本社ビルに移転
平成21年4月	ＣＴ事業部を改め、受託開発を設置
平成22年4月	ジャスダック証券取引所と大阪証券取引所の合併に伴い、大阪証券取引所ＪＡＳＤＡＱに上場
平成24年10月	群馬県高崎市に高崎営業所を新設
平成25年2月	株式会社コスメックス（ＳＭＯ事業：治験施設支援機関）を子会社化
平成25年7月	東京証券取引所と大阪証券取引所の統合に伴い、東京証券取引所ＪＡＳＤＡＱ（スタンダード）に上場
平成27年4月	大宮営業所を東京営業所に統合
	京都営業所、神戸営業所を大阪営業所に統合し、大阪営業所を大阪府大阪市北区へ移転
平成29年6月	株式会社コスメックスの全株式を譲渡
平成29年9月	宇都宮営業所、高崎営業所を統合し、埼玉県さいたま市大宮区に北関東営業所を新設
	沼津営業所を浜松営業所に統合し、浜松営業所を静岡県浜松市中央区へ移転
平成30年1月	労働者派遣事業許可取得（許可番号：派14-301695）
令和4年4月	東京証券取引所の市場区分の見直しにより、東京証券取引所のＪＡＳＤＡＱ（スタンダード）からスタンダード市場に移行
令和5年7月	石川県金沢市に金沢営業所を新設
令和7年9月	創立30周年。新たにミッション、ビジョン、バリューを策定。ロゴをリニューアル。

### 3【事業の内容】

#### (1) アウトソーシング事業

当社は、大手メーカーを中心とした顧客企業に対して、その開発パートナーとして技術、設計、開発部門等での機械設計、電子設計、ソフト開発の技術サービスを提供するアウトソーシング事業を展開しております。当社の提供するサービスは、従業員である技術者が担っており、顧客企業内で行われる設計・開発業務への派遣、または顧客から設計・開発等の業務を請負うことにより技術力を提供しております。

当社の事業の主要顧客はメーカーであり、顧客企業の事業区分別に見ると下表のとおりであります。

顧客企業の事業区分	当社の行う設計・開発の内容
輸送用機器関連	自動車(ボディ、シャーシ、エンジン、モーター、各種内外装品など)、車載用製品(カーエアコン、カーナビゲーション、エンジン制御装置・各種電子、制御装置など)、航空機、船舶など
機械関連	半導体製造装置、サービス用機器、アミューズメント機器、産業用ロボットなど
情報通信・精密機器関連	A V機器(液晶テレビ、プロジェクターなど)、携帯電話、プリンター、タブレットPC、医療機器など
電気電子機器・半導体回路関連	I o T機器(調理機器、洗濯機など)、ドローン、デジタルカメラ、電動工具、センサー、LSIなど
情報処理・ソフトウェア関連	通信システム(5Gなど)、自動運転システム(画像認識など)、AI、医療検査システム、制御システムなど

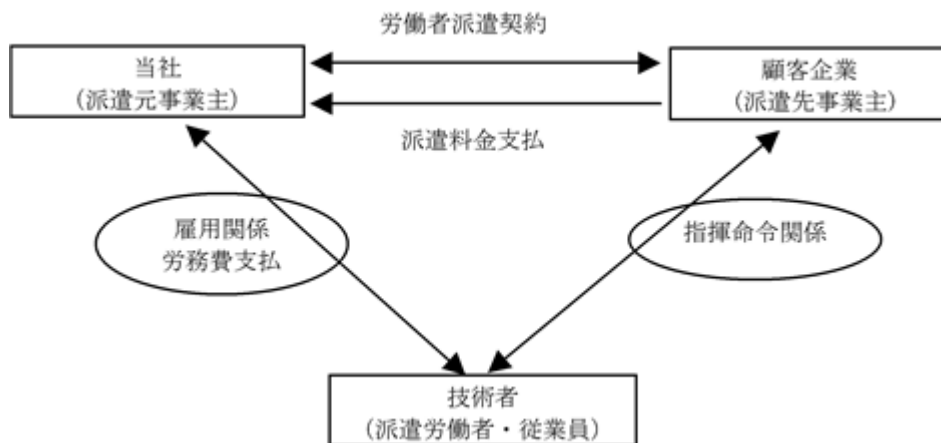
#### (2) 顧客企業との契約

メーカーが主な顧客であり、顧客企業の技術部、開発部、設計部など、技術の中核部門を取引先として、設計開発業務を派遣契約で行う場合と業務請負(委託)契約で行う場合があります。その契約については以下のとおりであります。

##### 労働者派遣契約

当社は、「労働者派遣事業の適正な運営の確保及び派遣労働者の保護等に関する法律」(以下、「労働者派遣法」という。)に規定される「労働者派遣事業」を行っております。

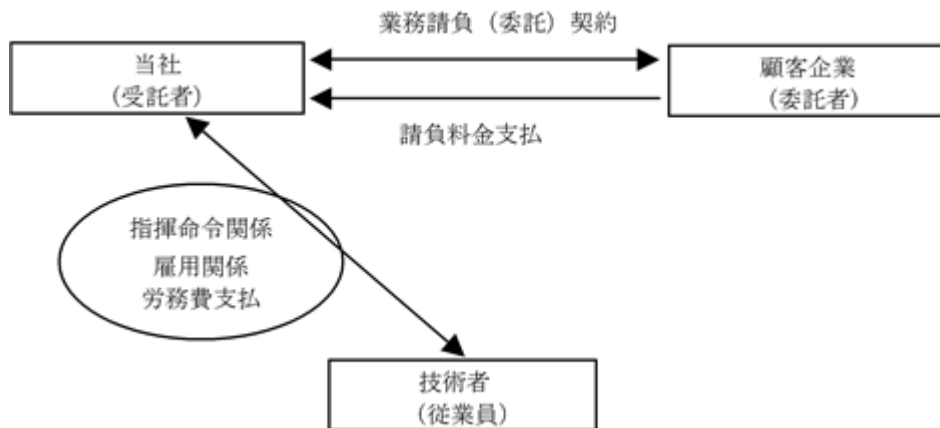
当社(派遣元事業主)が、自己の常用雇用する技術者(派遣労働者)を顧客企業(派遣先事業主)の指揮命令をうけて、派遣先事業主の労働に従事させることであり、当社・顧客企業・技術者の関係を図示すると、以下のようになります。



業務請負（委託）契約

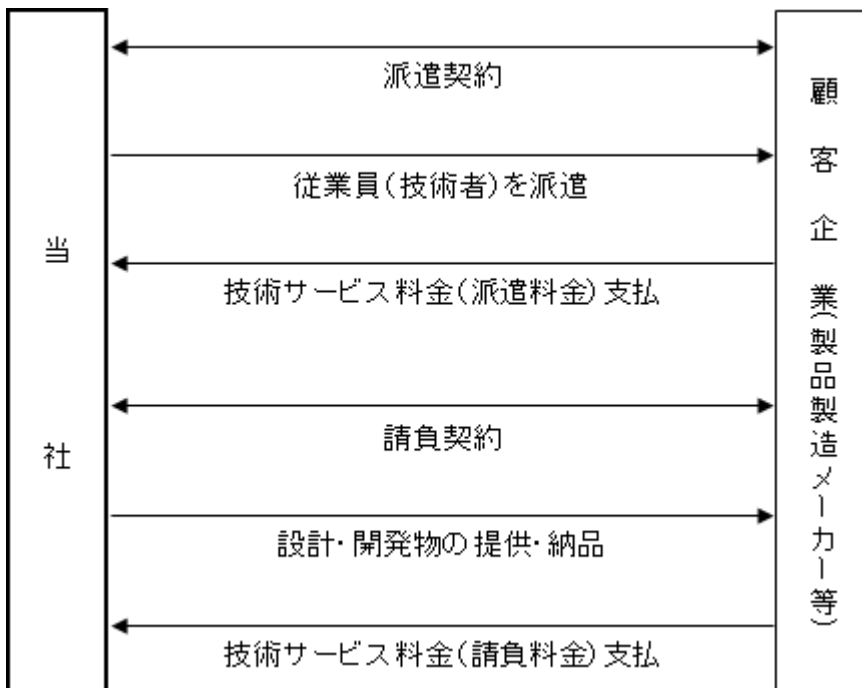
業務請負（委託）契約による技術サービスの提供は、顧客企業（委託者）から設計・開発を請負い、設計・開発の成果を提供しているものであります。請負による場合は、当社（受託者）が当社従業員に対し指揮・命令して設計・開発等を行っているものであります。

当社・顧客企業・技術者（従業員）の関係を図示すると、以下のようになります。



[事業系統図]

当社の事業を事業系統図によって示すと、次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

該当事項はありません。

## 第2【事業の状況】

### 1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

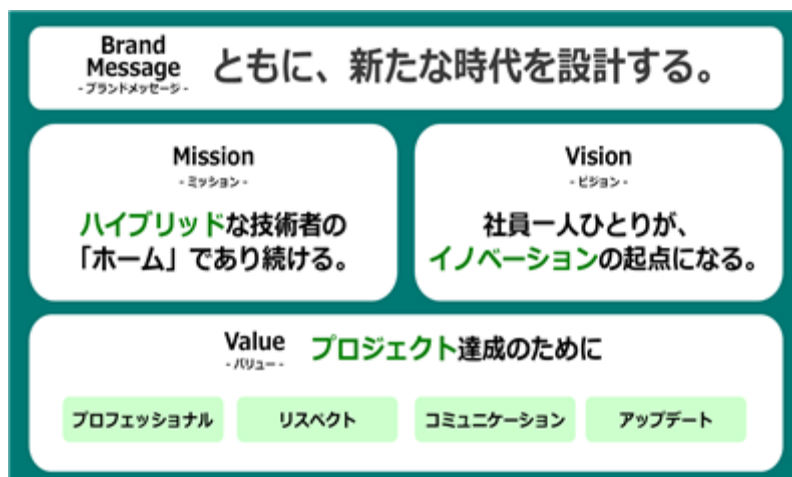
文中の将来に関する事項は、当事業年度末現在において当社が判断したものであります。

#### (1) 経営方針

当社は、「開発・設計のプロ集団として業界の長期安定と社員の永続的成長を図り技術を通じ社会に貢献する。」の経営理念に基づき、技術者のための会社作りと社員の育成、付加価値の高い技術力の提供により、顧客の価値創造に貢献してまいりました。

また、令和7年9月に経営理念を根幹に、新たな価値観としてミッション、ビジョン、バリューを策定しました。

「ともに、新たな時代を設計する。」をブランドメッセージとして、今後も技術者が生涯技術者として活躍していくための環境づくりとプロの技術者の育成によって質の高い技術サービスを提供し、企業や業界、技術の壁を越えた新たな価値の創造に挑戦してまいります。



#### (2) 経営戦略等

当社の主要事業である技術サービス事業の中心となるのは人材です。社員一人ひとりに寄り添い、技術者それぞれが成長していける「キャリア形成を支援する企業」こそ、真の意味で社員から選ばれ、顧客から選ばれる強い会社になると考えています。そのためには技術者の価値を高めていくことが重要です。プロの技術者を育成する教育体制の強化や能力を最大限発揮できる環境の提供、個々の目指すキャリアに即した幅広い分野の受注の獲得、会社と社員のつながりやサポート体制の強化、経済的なメリットの向上に取り組んでまいります。あわせて、多様化するお客様ニーズへの対応力と連携の強化、情報の発信力を強化してまいります。そして、当社の目指す姿や姿勢、価値観を社員一人ひとりの行動へと落とし込み、組織文化として根付かせていくことでサービスの質向上を図ってまいります。

技術者にとって魅力ある会社作りを進め、当社の技術者の価値を高めていくことで、その先にある顧客価値や企業価値、社会価値の向上を目指してまいります。

#### (3) 経営環境

自動車や航空機、半導体、製造装置、医療機器などの製造業を中心とした顧客企業では開発投資を継続するなかで、慢性的な技術者不足の状況にあり、当社への技術者要請は今後も継続していくことが見込まれます。一方で、国際情勢が顧客企業に与える影響については、不透明な要素が大きくその動向を注視していく必要がありますが、当社が事業展開する開発設計領域においては、各顧客企業とも長期的な視点に基づいた開発投資を進められることが多く、ただちにその影響を受けるものではないと考えております。また、AI活用の進展によって、定型業務の効率化などが進み、工程や領域によっては受注環境に一定の影響が生じると考えておりますが、上流工程の重要性は相対的に高まるが見込まれます。当社は複数領域で製品開発工程に関与していることから、現時点では全体としての影響は限定的と見ております。引き続き、顧客の開発環境の変化を注視してまいります。

#### (4) 経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社は、経営基盤、財務体質、キャリア形成支援の強化を図る上で、企業規模を拡大することが重要であると考えており、業務効率や管理効率、提案力の向上に向けた指標として社員数を重視しております。

また、収益性における指標としては営業利益と営業利益率を重視しており、当社事業の中心である人への投資とのバランスを取りながら収益力を高め、営業利益の向上に努めてまいります。

(5) 優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題

当社の主要事業である技術サービス事業の中心は人材です。自らの成長を求める技術者を支え続けるため、キャリア形成が望める環境づくりと、多様な働き方に応じていくことが必要です。

技術者と顧客に選ばれる強い会社として、ブランドメッセージである「ともに、新たな時代を設計する。」を実現し、技術者価値、顧客価値、企業価値、社会的価値を高めていくために、対処すべき課題は以下のとおりとなっております。

優秀な人材の確保

当社事業の成長には優秀な人材が欠かせません。当社の技術者は従来の組織内での働き方とは異なり、真のプロフェッショナルとして会社という組織を超えて横断的に設計・開発を行います。そのため、当社ならではの働き方や価値観、将来の方向性を正しく伝え共感を得る必要があります。リニューアルしたホームページや社員からのメッセージ、動画での解説、採用ツールなどを駆使して情報発信を強化し、採用力の強化を行ってまいります。

受注の獲得

安定的に受注量を確保することは、高い稼働率を維持するために重要です。また技術者のキャリア形成と多様な働き方に応えるために、幅広い業種や地域の受注を獲得していくことも大切です。全国に営業担当を配置し、顧客に寄り添った密接な対話から技術者ニーズをいち早く把握することに努め、最適な提案ができる社内連携の構築を進めることで、取引先の拡大を図ってまいります。

キャリア形成支援

当社のミッションで掲げる「ハイブリッドな技術者のホームであり続ける。」を体現し、技術者から選ばれる企業として重要なことは「自らの成長可能性が感じられること」であると考えています。主体的なキャリア形成が必要でありその環境の整備が大切です。一人ひとりが思い描くキャリアの実現のために、長期的な視点にたった教育や計画的な業務ローテーションによる多様な現場経験の提供、働きやすい環境の整備に取り組んでまいります。

当社ではこれらの施策を通じて、個々の社員のキャリアアップを図り技術者の価値を高めることこそが、顧客価値、企業価値、社会的価値の向上につながると考えております。経営理念で掲げる「社員の永続的成長」を実現していくためにも、最優先課題である人材への投資を行いキャリア形成支援企業としての成長を目指してまいります。

## 2【サステナビリティに関する考え方及び取組】

当社は、経営理念である「開発・設計のプロ集団として業界の長期安定と社員の永続的成長を図り技術を通じ社会に貢献する」に基づき、生涯技術者として自らのスキルを高め続けるプロの技術者へと成長できる教育体制や環境を整備し、技術者のキャリア形成支援に取り組んでおります。当社事業の中心である技術者の価値を高め、質の高い技術サービスを通じてお客様と共に環境・社会課題の解決に貢献していくことが、顧客価値・企業価値・社会価値を高め、持続的成長へとつながると考えています。

なお、文中の将来に関する事項は、当事業年度末現在において当社が判断したものであります。

### (1) ガバナンス

当社は事業部会を置き、担当役員及び事業部長、必要に応じ管理部門の部長等の出席のもと、毎月1回定期的に各部門に生じたサステナビリティ関連を含む問題等について検討しております。また、本社の管理部門長が出席する本社会議を定期的に開催し、サステナビリティを含む課題についての情報共有を行い、対応を検討しております。事業部会や本社会議で検討された内容は必要に応じて取締役会で報告され、取締役会の意見や助言が取り組みに反映される体制としております。

### (2) 戦略

様々な社会課題の解決に取り組まれているお客様へ技術サービスを提供する当社にとって、取引先を拡大していくことは、事業の持続的成長のみならず、社会課題解決の可能性を広げることにつながります。そのためにも技術者の新卒採用、中途採用に力を入れております。当社では新卒や未経験者などを基礎から育成してきた教育実績があり、技術者を目指す人々を支援していく体制が整備されていることから、経験の有無にかかわらず、幅広く柔軟な採用活動を実施しております。当社の価値観に共感していただける技術者の採用に努めてまいります。また女性の活躍を推進するため、女性社員の採用も積極的に進めてまいります。

その他にも、独立行政法人日本学生支援機構のソーシャルボンドへの投資を実施しており、我が国の教育面での課題解決を支援しています。今後も企業活動を通じて、持続可能な社会への貢献に取り組んでまいります。

人的資本につきましては、当社は技術者が「生涯技術者」「プロの技術者」として永続的に成長していくことを目指しており、設立当初から人材教育に力を入れております。具体的には、経験豊富な講師による社会人研修や、開発の第一線で活躍してきた技術者による長期的な成長を見据えた技術者の基盤確立に重点を置いた技術教育、経験年数に応じた段階別研修、オンライン研修やリーダー研修を実施しています。社会へ貢献できるプロの技術者の育成に向けて、技術力だけでなく人間力の向上にも注力しています。加えて、幅広い業種の顧客に対し技術力を提供している強みを活かし、個々のキャリア形成に即した業務への転換を図るなど社員の能力向上に努めています。

また、技術者が生涯技術者として安心して働きやすい環境の整備を推進しています。教育体制を始めとした希望するキャリアを実現するための体制作りや受注の獲得、男性の育児休業取得などを促進し、社員が長きにわたり活躍していけるよう誰もが働きやすい環境づくりに取り組んでまいります。

### (3) リスク管理

当社は事業運営に影響を及ぼす可能性があるリスクについては事業部会、本社会議で対応を検討しております。サステナビリティに関するリスクにおいても事業部会、本社会議で分析、評価を行い必要に応じて取締役会で報告し適切に対応してまいります。

### (4) 指標及び目標

当社は、開発・設計にかかわるあらゆる産業の発展と長期安定を図り、技術を通じた社会貢献を推進するため、幅広い業種や地域へ取引先を拡大することが重要であるとの考えから、以下のとおり社員数を指標とし、中長期的な目標を立てております。

指標	目標	実績（当事業年度）
社員数	1,000人	855人

人的資本につきましては、上記「(2) 戦略」において記載した人材の育成及び社内環境整備に関する方針について以下の指標を用いております。当該指標に関する目標及び実績は、次のとおりであります。

指標	目標	実績（当事業年度）
段階別研修の受講割合	90%	75.7%
女性労働者の育児休業取得率	100%	66.7%
男性労働者の育児休業取得率	60%	33.3%

### 3【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が提出会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスクは、以下のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当事業年度末現在において当社が判断したものであります。

#### 顧客メーカーの業績等による影響について

当社の主要顧客はメーカーであり、その技術開発部門に対して技術サービスを提供しております。国内経済及び世界経済の景気が悪化し、顧客メーカーの業績低迷から、設計開発部門における開発費の削減や、アウトソース活用を抑制した場合、当社の業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

当社では新規開拓営業によって様々な業種や企業との取引先拡大を推進しており、年間約200社の顧客との取引実績を有しております。顧客との綿密なコミュニケーションなどから業種や企業毎の情報収集に注力し、状況に応じた戦略的な営業展開を図り、業績に及ぼす影響を最小限にとどめるよう努めております。

#### 法的規制について

当社の事業では、技術者派遣が主要事業となっており、「労働者派遣事業の適正な運用の確保及び派遣労働者の保護等に関する法律」（以下、「労働者派遣法」という。）に基づいて事業を行っております。当社では関係法令の遵守に努め労働者派遣事業を行っておりますが、労働者派遣法に定める派遣元事業主としての欠格事由に該当した場合や、関係法令に違反するような行為や事象が発生した場合には当該事業の停止を命じられ、事業が営めなくなるリスクがあります。

また、今後新たに法規制の緩和や改正などが行われた場合、当社の事業に不利な影響を及ぼすものであれば、当社の業績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

これまで施行された労働者派遣法の改正に対しては、必要な手続きと適切な対応を実施しております。今後も、管轄官庁からの情報を漏れなく収集し、適時適法に対応するよう努めてまいります。

#### 競争について

当社が属するアウトソーシング業界において、新規参入や業界規模の縮小などにより、業界内での企業間競争が激化し、同業他社の低価格戦略や取引先からの値下げ要請を受ける可能性もあります。当社は、提供する技術サービス品質の向上を図るほか、戦略的営業と技術者教育の推進により、適正な収益を確保しつつ事業の拡大を図るべく努めておりますが、競争の激化により受注が十分に確保できない、又は技術料金の低下等が生じた場合には当社の業績及び財政状態に影響を受ける可能性があります。

なお、当該リスクが顕在化した場合の経営成績等の状況に与える影響の程度につきましては、技術料金は当社事業の重要な構成要素であり、売上高の減少及び利益率の低下が見込まれます。顕在化する可能性の程度は現時点では認識しておりませんが、教育の充実による技術者のスキルアップなど、技術サービス品質の向上を図るほか、技術スキルに応じた適正な配属、顧客との継続的な契約条件の交渉を図り、適正な収益を確保しつつ事業の拡大に努めております。

#### 技術者の確保について

当社の事業では、サービスを提供する技術者が重要な経営資源であり、優秀な技術者の確保が事業拡大の必要条件であります。経済環境や雇用環境の変化により、技術者の確保が十分に行えない場合には、当社の業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

なお、当該リスクが顕在化した場合の経営成績等の状況に与える影響の程度は想定しておりません。日本の雇用情勢は長期的には少子高齢化による生産年齢人口（15歳～64歳）の減少が懸念されております。当社では、安定して優秀な人材を採用できるよう、技術者第一の会社作りを進めてきた会社の姿勢や価値観をしっかりと伝え、時代に合わせた丁寧な採用活動に努めております。そして、技術者が生涯技術者としてのキャリアを実現できる環境の整備を継続的に推進し、定着率向上にも努めております。

#### 機密情報や個人情報の情報管理について

当社がサービスを提供するにあたり、顧客企業における機密性の高い情報や、数多くの顧客情報・個人情報を有しております。そのため、当社では全社員に情報管理の重要性を認識させるため指導・教育を行っており、情報の管理・取扱いには細心の注意を払い、厳正な管理に努めております。しかしながら、何らかの事由により、万一機密情報の漏えいが発生した場合、当社の社会的信用への影響や、その対応による多額の費用が発生する恐れがあります。これまでにそのような事実が発生したことはありませんが、発生した場合には、当社の業績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

なお、当該リスクが顕在化した場合の経営成績等の状況に与える影響の程度は想定しておりません。顕在化する可能性の程度は現時点では認識しておりませんが、時代に即した機密情報管理ルールへの更新や社員への機密情報管理教育の徹底、情報システム管理の強化に力を入れ、機密情報の漏えいを未然に防ぐ体制の構築に努めております。

#### 取引先業種の偏りについて

当社の顧客企業毎の業種別売上高をみると、自動車を中心とした輸送用機器業界への売上高構成比が高く、依存度の高い業界が不振となるなどの場合には、当社の業績及び財政状態に影響を受ける可能性があります。当社では、新規開拓営業などによって幅広い業種や企業との取引先拡大を推進しており、輸送用機器業界への売上高構成比は、令和6年3月期は31.8%、令和7年3月期は32.3%、令和8年3月期は30.5%と推移しております。なお、顕在化する可能性の程度は現時点では認識しておりませんが、全国に展開する営業所や事業部間の連携を強めた営業展開を推進し、新規開拓営業を中心とした幅広い業種への営業活動を行い、業種の偏りの緩和に取り組んでおります。

#### 自然災害等について

予期せぬ地震等の自然災害や事故、感染症の蔓延等により、当社や顧客企業において事業活動の停止などの被害が発生した場合には、当社の業績及び財政状態に影響を与える可能性があります。

なお、当該リスクが顕在化した場合、経営成績等の状況に与える影響の程度は災害規模等により想定することは困難ですが、売上高の逸失につながる可能性があります。顕在化する可能性の程度は現時点では認識しておりませんが、当社では社員の安否確認体制の構築、定期的な備蓄品の補充や更新、全社員への防災備蓄品の配布、重要データのバックアップ、テレワーク対応など緊急時における社内体制の整備に取り組み、業績への影響の低減に努めております。

#### 4【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

##### 業績等の概要

##### (1) 経営成績等の状況の概要

当事業年度における当社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

##### 財政状態及び経営成績の状況

当事業年度において、自動車、航空機、半導体、製造装置、医療機器などの製造業を中心とした顧客企業では、米国の関税政策による先行きの不透明さが緩和されるなかで、製品開発への積極姿勢を維持しており、開発設計技術者の増員に向けた当社へのニーズは、堅調に推移しました。

当社では、長期的な成長へ向けた技術者教育の充実、スキルの幅を広げ多様な働き方を実現するための受注の獲得と業務ローテーション、全社での情報共有やコミュニケーション強化、社員の待遇改善を含めた働く環境の整備への投資を進め、会社の魅力を高めつつ積極的に丁寧な採用活動を推進しています。また、創立30周年を機にリブランディングを実施しました。新たなブランドメッセージ『ともに、新たな時代を設計する。』のもと、Mission/Vision/Valueの策定に加え、ロゴとコーポレートサイトを刷新しました。技術者の価値向上とキャリア形成支援への取り組みを進め、将来の予測が困難な時代においても生涯にわたり活躍する人材の育成に向けて、今後もプロフェッショナル集団として持続的な成長を目指してまいります。

このような状況のなか、技術者数の増加に加え、技術者の成長に重点をおいた稼働を推進した結果、稼働率は低下したものの高い水準を維持し、稼働人員は前年同期を上回りました。技術料金はお客様満足度を高める取り組みと技術者価値を反映した適正レートの確保に向けた丁寧な交渉を重ねた結果、前年同期を上回りました。稼働時間は前年同期と同水準となりました。

また利益面においては、社員の処遇改善に伴う売上原価の増加、リブランディングや社員向け周年イベントの実施等に伴う広告宣伝費や福利厚生費等の増加はあったものの、増収効果がこれを吸収し、各利益も増加しました。

これらの結果、当事業年度の財政状態及び経営成績は以下のとおりとなりました。

##### (a) 経営成績

当事業年度の売上高は6,193,609千円（前年同期比3.8%増）、売上原価は4,823,037千円（同4.1%増）、販売費及び一般管理費は797,654千円（同3.7%増）、営業利益は572,918千円（同1.4%増）、経常利益は580,228千円（同2.8%増）、当期純利益は432,752千円（同4.6%増）となりました。

##### (b) 財政状態

##### （資産）

当事業年度末における流動資産合計は3,965,899千円となり、前事業年度末に比べ294,654千円減少いたしました。これは主に現金及び預金が356,249千円減少、電子記録債権が4,642千円減少、売掛金が72,972千円増加したことなどによるものであります。

固定資産合計は1,735,270千円となり、前事業年度末に比べ91,169千円増加いたしました。これは主に有形固定資産合計が16,091千円減少、無形固定資産合計が4,557千円減少、投資有価証券が100,000千円増加、繰延税金資産が12,212千円増加したことなどによるものであります。

この結果、資産合計は5,701,169千円となり、前事業年度末に比べ203,484千円減少いたしました。

##### （負債）

当事業年度末における流動負債合計は1,125,829千円となり、前事業年度末に比べ310,305千円減少いたしました。これは主に短期借入金400,000千円減少、未払費用が12,033千円増加、未払法人税等が64,367千円増加、賞与引当金が8,395千円増加、未払消費税等（その他）が4,603千円増加したことなどによるものであります。

固定負債合計は498,428千円となり、前事業年度末に比べ9,791千円増加いたしました。これは退職給付引当金が5,858千円増加、役員退職慰労引当金が3,932千円増加したことによるものであります。

この結果、負債合計は1,624,258千円となり、前事業年度末に比べ300,513千円減少いたしました。

##### （純資産）

当事業年度末における純資産合計は4,076,911千円となり、前事業年度末に比べ97,029千円増加いたしました。これは当期純利益432,752千円、剰余金の配当209,800千円、自己株式の取得125,922千円によるものであります。

この結果、自己資本比率は71.5%（前事業年度末は67.4%）となりました。

キャッシュ・フローの状況

当事業年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前事業年度末に比べ856,249千円減少し、当事業年度末には2,576,749千円となりました。

当事業年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果、得られた資金は483,352千円（前事業年度は217,540千円）となりました。これは主に税引前当期純利益580,228千円、売上債権の増減額の増加68,329千円、未払費用の増減額の増加12,033千円、法人税等の支払額95,598千円などによるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果、使用した資金は603,825千円（前事業年度は 95,169千円）となりました。これは定期預金の預入による支出500,000千円、有形固定資産の取得による支出3,825千円、投資有価証券の取得による支出100,000千円によるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果、使用した資金は735,775千円（前事業年度は 444,899千円）となりました。これは短期借入金の純増減額の減少400,000千円、自己株式の取得による支出126,639千円、配当金の支払額209,136千円によるものであります。

生産、受注及び販売の実績

(a) 生産実績

当社の主たる業務であるアウトソーシング事業は、機械、電気・電子、ソフトウェアの設計開発などの技術提供サービス事業であり、提供するサービスの性格上、生産実績になじまないため、記載を省略しております。

(b) 受注実績

当社のアウトソーシング事業はその形態から受注金額と販売金額がほぼ同等となるために、記載を省略しております。

(c) 販売実績

当事業年度の販売実績は次のとおりであります。

セグメントの名称	当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)	前年同期比
アウトソーシング事業	6,193,609千円	3.8%

## (2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中における将来に関する事項は、当事業年度末現在において判断したものであり、将来に関する事項は不確実性を有しており、実際の結果と異なる可能性もありますのでご留意ください。

### 財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容

#### (a) 経営成績の分析

当社の当事業年度の経営成績については、売上高は6,193,609千円（前年同期比3.8%増）となりました。増加の主な要因は技術料金の上昇と稼働人員の増加です。技術料金はお客様満足度を高める取り組みと技術者価値を反映した適正レートの確保に向けた丁寧な交渉を続けたことで、前年同期比3.8%増となりました。稼働人員の増加は技術者数の増加と高稼働率の維持によるものです。期末技術者数は新卒及び中途採用数の増加によって前年同期比1.0%増となり、通期稼働率は米国関税の影響から一部のお客様で慎重さが見られたことや技術者の成長に重点をおいた稼働を推進したことで、93.2%（同1.4ポイント減）と前年同期からは低下したものの高水準を維持しました。

また売上原価は、引き続き技術者価値を高めるために、社員の処遇改善や教育の充実などの人材への投資を推進したことで、4,823,037千円（同4.1%増）と増加しました。

販売費及び一般管理費は797,654千円（同3.7%増）となり、リブランディングや社員向け周年イベントの実施等に伴う広告宣伝費や福利厚生費等が増加しました。

営業利益及び経常利益は売上原価や販売費及び一般管理費の増加に伴う減少要因はありつつも、売上高の伸長により、営業利益572,918千円（同1.4%増）、経常利益580,228千円（同2.8%増）となりました。当期純利益は社員の賃上げに伴う減税効果もあり、432,752千円（同4.6%増）となりました。

#### (b) 財政状態の分析

財政状態の分析については、「(1) 経営成績等の状況の概要 財政状態及び経営成績の状況」に記載しております。

#### (c) 経営成績に重要な影響を与える要因

当社の経営成績に重要な影響を与える要因としては、景気動向や市場環境の変化、法的規制、同業他社等の様々なリスク要因があると認識しております。詳細については、「第2 事業の状況 3 事業等のリスク」をご参照ください。

#### (d) 経営方針・経営戦略、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社は経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等として、中長期的には社員数1,000名体制、営業利益率10%の目標を掲げております。当事業年度において社員数は855名（前年同期比1.3%増）となりました。目標へ向けて新卒及び中途技術者の積極的な採用を継続してまいります。営業利益率は9.3%（同0.2ポイント減）となりました。今後も技術者価値を高めるため、社員の個々のキャリア形成を実現、プロの技術者の育成や働きやすさの整備などへの投資を強化しつつ、経営効率を高めて利益率の向上を目指してまいります。

### キャッシュ・フローの状況の分析・検討内容並びに資本の財源及び資金の流動性に係る情報

当社の当事業年度のキャッシュ・フローの分析については、「(1) 経営成績等の状況の概要 キャッシュ・フローの状況」に記載しております。

当社の資本の財源及び資金の流動性については、次のとおりであります。

資本政策につきましては、内部留保の充実を図るとともに、経営基盤の長期安定に向けた財務体質の強化及び事業の継続的な拡大発展を実現させることと、株主様への利益還元を考慮し、実施していくこととしております。

当社の資金需要の主なものは、主たる事業であるアウトソーシング事業に係る人件費のほか、販売費及び一般管理費の採用費、人件費等の事業に係る運転資金であります。

当社は必要となった資金については、主として内部留保資金及び営業活動によるキャッシュ・フローによるものを活用しております。

なお、当事業年度末における現金及び現金同等物の残高は2,576,749千円となっております。

**重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定**

当社の財務諸表は、我が国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この財務諸表の作成に当たって、見積りが必要となる事項につきましては、合理的な基準に基づき、会計上の見積りを行っております。これらの見積りについては、継続して評価し、必要に応じて見直しを行っておりますが、見積りには不確実性が伴うため、実際の結果はこれらと異なる場合があります。

なお、当社の財務諸表で採用した重要な会計方針は、「第5 [ 経理の状況 ] 1 [ 財務諸表等 ] (1) [ 財務諸表 ] の [ 注記事項 ] (重要な会計方針)」に記載しております。

**5 【重要な契約等】**

該当事項はありません。

**6 【研究開発活動】**

当社は、研究開発活動を行っておりません。

### 第3【設備の状況】

#### 1【設備投資等の概要】

当社の設備投資については、景気予測、業界動向、投資効率等を勘案して策定しております。当事業年度において重要な設備投資はありません。

また、当事業年度において、重要な設備の除却、売却等もありません。

#### 2【主要な設備の状況】

当社は、国内に9営業所、4つの社員寮を有しております。

以上のうち、主要な設備は、以下のとおりであります。

令和8年3月31日現在

事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価額(千円)				従業員数 (名)
		建物及び 構築物	工具、器具 及び備品	土地 (面積㎡)	合計	
本社 横浜営業所 (横浜市西区)	統括業務施設 営業管理施設 教育研修施設	123,525	4,048	405,061 (430.70)	532,635	242
東京営業所他 (東京都渋谷区)	営業管理施設	287	0	-	287	191
名古屋営業所他 (名古屋市中村区)	営業管理施設	121	0	-	121	267
大阪営業所他 (大阪市北区)	営業管理施設	342	-	-	342	155
社員寮 (神奈川県藤沢市)	福利厚生施設	18,200	74	124,123 (555.88)	142,399	-
社員寮 (愛知県安城市)	福利厚生施設	91,448	-	126,751 (1,077.64)	218,200	-
社員寮 (兵庫県三田市)	福利厚生施設	21,002	-	206,214 (3,441.74)	227,217	-
社員寮 (横浜市神奈川区)	福利厚生施設	12,277	500	105,907 (284.68)	118,685	-

(注) 本社、横浜営業所、社員寮を除く事業所は賃借物件であります。主な賃借設備は次のとおりであります。

事業所名 (所在地)	設備の内容	賃借料(千円)	リース料(千円)
本社 横浜営業所 (横浜市西区)	リース工具器具備品	-	14,517
東京営業所 (東京都渋谷区)	賃借建物・リース工具器具備品	9,903	18
名古屋営業所 (名古屋市中村区)	賃借建物・リース工具器具備品等	9,239	798
大阪営業所 (大阪市北区)	賃借建物・リース工具器具備品	9,374	85

(注) 令和7年4月1日から令和8年3月31日までの期間に係る金額を記載しております。

#### 3【設備の新設、除却等の計画】

当社の設備投資については、景気予測、業界動向、投資効率を勘案して策定しております。

令和8年3月31日現在、重要な設備の新設、除却等の計画はありません。

## 第4【提出会社の状況】

### 1【株式等の状況】

#### (1)【株式の総数等】

##### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	13,500,000
計	13,500,000

##### 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (令和8年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (令和8年6月19日)	上場金融商品取引所名又は登録認可 金融商品取引業協会名	内容
普通株式	3,975,300	3,975,300	東京証券取引所 スタンダード市場	単元株式数 100株
計	3,975,300	3,975,300	-	-

#### (2)【新株予約権等の状況】

##### 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

##### 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

#### (3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

#### (4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金 増減額 (千円)	資本金 残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
平成25年4月1日 (注)	3,935,547	3,975,300	-	377,525	-	337,525

(注) 株式分割(1:100)によるものであります。

(5) 【所有者別状況】

令和8年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	3	13	29	12	4	2,738	2,799	-
所有株式数(単元)	-	820	392	14,682	769	7	22,924	39,594	15,900
所有株式数の割合(%)	-	2.07	0.99	37.08	1.94	0.02	57.90	100	-

(注) 自己株式170,109株は、「個人その他」に1,701単元、「単元未満株式の状況」に9株含めて記載しております。

(6) 【大株主の状況】

令和8年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社ベストプランニング	岐阜県瑞穂市1107-1	1,353,800	35.57
ヒップ従業員持株会	神奈川県横浜市西区楠町8-8	323,500	8.50
光通信KK投資事業有限責任組合	東京都豊島区西池袋1-4-10	164,900	4.33
株式会社横浜銀行 (常任代理人 株式会社日本カストディ銀行)	神奈川県横浜市西区みなとみらい3-1-1 (東京都中央区晴海1-8-12)	45,000	1.18
田中 伸明	神奈川県茅ヶ崎市	44,400	1.16
光通信株式会社	東京都豊島区西池袋1-4-10	39,700	1.04
THE BANK OF NEW YORK MELLON 140042 (常任代理人 株式会社みずほ銀行決済営業部)	240 GREENWICH STREET, NEW YORK, NY 10286, U.S.A. (東京都港区港南2-15-1 品川インターシティA棟)	37,000	0.97
亀山 弓子	岐阜県瑞穂市	36,900	0.96
日本生命保険相互会社 (常任代理人 日本マスタートラスト信託銀行株式会社)	東京都千代田区丸の内1-6-6 日本生命証券管理部内 (港区赤坂1-8-1 赤坂インターシティAIR)	36,000	0.94
光1号配当特化投資事業有限責任組合	東京都千代田区丸の内1-11-1	35,700	0.93
計	-	2,116,900	55.63

(注) 当社は自己株式を170,109株保有しておりますが、上記大株主からは除外しております。

(7)【議決権の状況】  
【発行済株式】

令和8年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 170,100	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 3,789,300	37,893	-
単元未満株式(注)	普通株式 15,900	-	-
発行済株式総数	3,975,300	-	-
総株主の議決権	-	37,893	-

(注)「単元未満株式」の欄には自己株式9株が含まれております。

【自己株式等】

令和8年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社ヒップ	神奈川県横浜市西区楠町8-8	170,100	-	170,100	4.27
計	-	170,100	-	170,100	4.27

## 2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号に該当する普通株式の取得

### (1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

### (2)【取締役会決議による取得の状況】

会社法第165条第3項の規定により読み替えて適用される同法第156条の規定に基づく取得

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(令和7年11月5日)での決議状況 (取得期間 令和7年11月6日~令和8年3月31日)	80,000	130,000,000
当事業年度前における取得自己株式	-	-
当事業年度における取得自己株式	80,000	125,922,900
残存決議株式の総数及び価額の総額	-	4,077,100
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	-	3.13
当期間における取得自己株式	-	-
提出日現在の未行使割合(%)	-	3.13

(注) 令和8年2月3日の自己株式の取得をもって、令和7年11月5日開催の取締役会決議に基づく自己株式の取得は終了しました。

### (3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	-	-
当期間における取得自己株式	-	-

(注) 当期間における保有自己株式数には、令和8年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

### (4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他(-)	-	-	-	-
保有自己株式数	170,109	-	170,109	-

(注) 当期間における保有自己株式数には、令和8年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

### 3【配当政策】

当社は、利益配分の基本方針として、財務の健全性と企業価値向上へ向けた成長投資のバランスを考慮しつつ、株主の皆様への安定的な配当を継続していくこととしております。

配当政策につきましては、配当性向50%を目安とし、着実な事業成長とともに累進的配当を目指してまいります。

当社の剰余金の配当は、年1回の期末配当を基本的な方針としており、期末配当の決定機関は株主総会でありま

す。

当期の剰余金の配当につきましては、基本方針をもとに、令和7年9月に当社が創立30周年を迎えたことに対する皆さまへの感謝の意も込めて、令和8年6月26日の定時株主総会により、1株当たり普通配当55円に記念配当15円を加えた70円、配当金の総額の266,363,370円を実施する予定であります。

当期の内部留保金につきましては、今後の経営環境の変化等に対応すべく、市場ニーズに応える技術力や技術サービスの質の向上等、当社の永続的成長を図るために活用してまいりたいと考えております。

なお、当社は、「取締役会の決議によって、毎年9月30日の最終の株主名簿に記載または記録された株主または登録株式質権者に対し、会社法第454条第5項に定める剰余金の配当をすることができる。」旨、定款で定めております。

## 4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

### (1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

企業におけるコーポレート・ガバナンスの重要性が益々高まっていく中、当社といたしましては長期安定的な株主価値の向上と経営の効率性、透明性を向上させるため、迅速で正確な経営情報の把握と、公正で機能的な意思決定を行いながら、株主の立場に立って企業価値を最大化することを基本方針にしております。又、より高い技術力を目指す技術者集団として顧客企業とともに共存共栄のもと永続的成長を図り、技術を通し社会に貢献していくことを目標としております。

会社の社会的役割を認識し、法令、規則を遵守し、社内外へのタイムリーな情報公開を行うことで、株主をはじめステークホルダー（株主、取引先、従業員など）との友好な関係の維持発展に努めてまいります。

機動的な経営管理体制のもと、経営環境の変化に柔軟に対応できるように、内部統制、リスクマネジメントを強化するとともに、監査体制の充実を図ってまいります。また、社外への情報開示を迅速に行い、経営の公正性ならびに透明性を高めてまいります。

企業統治の体制

#### イ．企業統治体制の概要

提出日（令和8年6月19日）現在、当社の取締役会は、代表取締役社長 田中伸明が議長を務め、取締役 大原達朗、取締役 倉掛達也、取締役 陶山五彦、社外取締役 及川善雅、社外取締役 池田由美子の取締役6名（うち社外取締役2名）で構成され毎月1回以上の開催を原則とし、経営管理の意思決定機関として法定事項及び業務執行に関する重要事項の審議、決定及び業務執行状況の監督を行っております。

監査役会は、監査役 石樽享司、社外監査役 佐藤正八郎、社外監査役 前田泰志の常勤監査役1名、非常勤監査役（社外監査役）2名の計3名で構成され、法令・定款の遵守、経営方針に基づく業務執行状況、コーポレート・ガバナンスの視点から会社運営が適切な内部統制システムのもとに適法かつ妥当に行われているかを監査しております。なお、法令に定める監査役の員数を欠くことになる場合に備え、補欠監査役を1名選任しております。

会計監査については、財務報告の適法性及び信頼性並びにコーポレート・ガバナンスの一層の強化を図るため、令和4年6月29日開催の第27期定時株主総会においてアーク有限責任監査法人を会計監査人として選任しております。

また、内部監査部門として内部監査室を設け、内部監査室長 財津秀明が内部監査規程に基づき、年2回定期的に各部門の業務執行が有効かつ適正に行われているかを監査しております。内部監査室は、当社の財務報告に係る内部統制の要としても機能しております。

別途、企業統治体制上有用な会議体として本社会議および事業部会を置いています。

本社会議は原則として毎週開催され、本社各管理部門における情報共有を行い、今後の事業運営の方向付け、派遣状況の把握、人事制度、教育体制など派遣事業における主要な検討事項の精査を行っております。構成としては、代表取締役社長が議長となり、本社各部門長が出席しております。

事業部会は毎月1回定期的に各事業部で生じた問題や利益計画の進捗状況等について検討しております。構成としては、取締役事業本部長が議長となり、各事業部長が毎回出席、必要に応じて本社各部門長が出席しております。本社会議および事業部会には、リスクマネジメントに係る第1次的検討合議体の1つとしての役割もあります。

なお、企業の社会的役割という視点から、上記の各機関による業務執行に対する牽制作用の確保、コンプライアンスの尊重に加えて、タイムリーな企業情報の開示を実施することにより、株主に限らず、従業員、取引先等多様なステークホルダーとの友好関係の維持に努めております。

#### ロ．企業統治の体制を採用する理由

当社は、企業統治の目的は企業の不祥事を防ぎながら企業価値を継続的に創造していくことにありと認識しておりますが、企業統治の体制を考えるに当たって重視すべきは「企業の不祥事を防ぐこと」にあると考えております。企業の所有と経営の分離が進み、所有者である株主が株式会社の最高機関である株主総会の構成員として、また株主としての権利行使として行動しても自ら経営を統制することは困難な状況にあります。そのため、企業統治の実効性を確保するためには、会社の内部組織である取締役会、監査役会、内部監査担当部門による監督監視という牽制作用が十分に機能することが肝要であります。また、取締役会、監査役会、内部監査担当部門による監督監視活動を支え、さらにコンプライアンス体制を確保するという観点から、社内規程の充実を図ることが極めて重要であると考えております。

企業統治に関するその他の事項

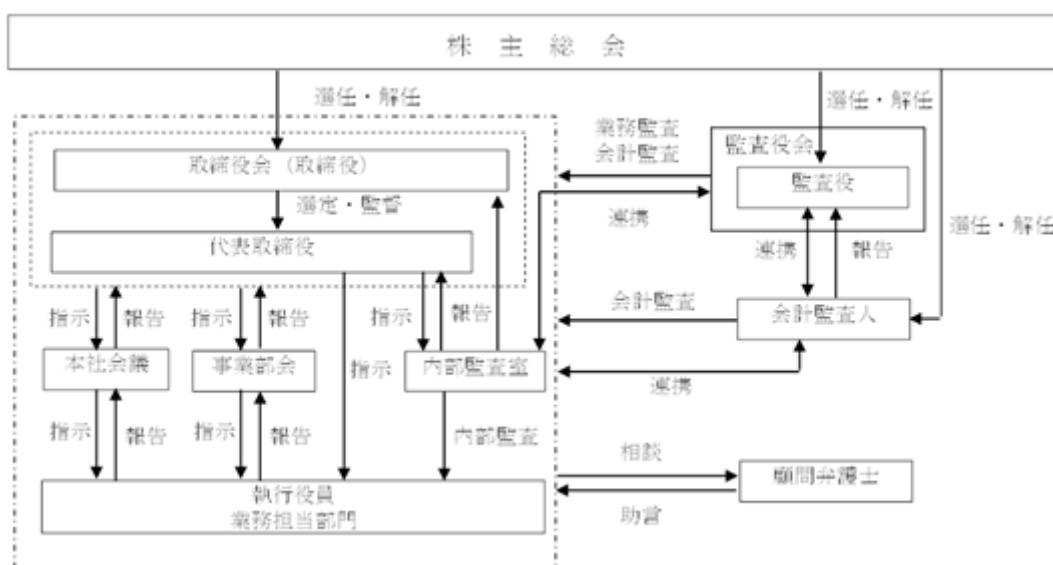
イ．内部統制システムの整備の状況

当社は、会社法に基づく内部統制システムについて、取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制等の基本体制を前提におきそれぞれに基本方針を策定し、平成18年11月の取締役会で承認しております。その後毎年3月の取締役会でその対応状況を確認し更なる充実に向けて検討を続けております。また、金融商品取引法に基づく財務報告に係る内部統制については、企業会計審議会の公表した財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して、年度ごとに「財務報告に係る内部統制の基本的計画及び方針」を策定しております。内部統制については、取締役会、監査役会、内部監査室に止まらず従業員もその担い手として位置づけております。また、常設機関として内部統制定例会を設置して、内部統制上のリスクに対しては速やかに対応できる体制が整っております。

ロ．リスク管理体制の整備の状況

当社は、取締役会の監督活動、監査役の監査、内部監査、日常的モニタリング、監査法人の監査、財務報告に係る内部統制の評価活動、内部通報制度により日頃よりリスクの早期発見及び未然の防止に努めております。また、リスクの発見の報告を受けた内部統制定例会、事業部会、取締役会は情報を共有し、事実関係を確認し、原因を分析し、対応策を協議しております。さらに改善状況の確認、フォローを行うことにより、リスクの解消、軽減に努めております。

当社の企業統治の模式図は次のとおりであります。



取締役の定数

当社は、取締役の定数を8名以内とする旨を定款に定めております。

取締役の選任及び解任の決議要件

当社は、取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。また、解任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の過半数を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。

株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

取締役会で決議することができる株主総会決議事項

イ．取締役及び監査役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定に基づき、任務を怠ったことによる取締役（取締役であったものを含む。）及び監査役（監査役であったものを含む。）の損害賠償責任を法令が規定する限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨を定款で定めております。これは、取締役及び監査役が期待される役割を十分に発揮することを目的とするものであります。

ロ．剰余金の配当（中間配当金）

当社は、取締役会の決議によって、毎年9月30日の最終の株主名簿に記載または記録された株主または登録株式質権者に対し、会社法第454条第5項の規定に定める剰余金の配当（中間配当金）を行うことができる旨を定款で定めております。これは、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

ハ．自己株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議をもって自己の株式を取得することができる旨を定款に定めることを、平成22年6月29日に開催された第15期定時株主総会において決議承認いただいております。これは、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行を可能とするため、市場取引等により自己の株式を取得することを目的とするものであります。

取締役会の活動状況

当事業年度において当社は取締役会を原則として月1回、合計15回開催しております。個々の取締役の出席状況は次のとおりであります。

氏名	開催回数	出席回数
田中 伸明	15	15
大原 達朗	15	15
倉掛 達也	15	14
陶山 五彦	15	15
及川 善雅	15	15
池田 由美子	15	15

取締役会における具体的な検討内容としては、予算の進捗状況、各営業所の派遣事業推進状況、財務報告に係る内部統制の整備運用状況、利益配分に関する基本方針の変更、自己株式の取得等がございました。

(2) 【役員の状況】

提出日(令和8年6月19日)現在の当社の役員の状況は以下のとおりです。

男性8名 女性1名 (役員のうち女性の比率11.1%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役社長 (代表取締役)	田中 伸明	昭和52年10月15日生	平成13年4月 当社入社 平成18年4月 中部事業部名古屋営業所長 平成19年10月 経営企画部課長 平成21年4月 営業企画部課長 平成25年2月 株式会社コスメックス出向 取締役事業推進部長 平成28年6月 当社取締役就任 株式会社コスメックス 取締役事業推進部長 平成29年6月 当社取締役 企画部長 平成30年6月 当社取締役 企画部長 経理担当 令和3年6月 当社取締役 企画部長 総務担当 令和4年4月 当社取締役 経営企画部長 令和4年6月 当社専務取締役就任 経営企画部長 令和5年8月 当社代表取締役社長就任(現任)	(注)3	44,400
取締役 事業本部長	大原 達朗	昭和39年10月8日生	平成18年11月 当社入社 平成21年4月 中部事業部 営業担当部長 平成24年7月 東海・北陸統括部 統括部長 平成27年4月 神奈川・静岡統括部 統括部長 平成28年11月 中日本事業部 特命部長 平成30年2月 執行役員 中日本担当 令和元年6月 取締役就任 中日本担当 令和2年10月 取締役 中日本事業部長 令和4年4月 取締役 事業本部長 中日本担当 令和4年10月 取締役 事業本部長 令和5年8月 取締役 事業本部長兼 経営企画部長 令和6年7月 取締役 事業本部長(現任)	(注)3	3,400
取締役 西日本事業部長	倉掛 達也	昭和43年6月20日生	平成12年5月 当社入社 平成20年4月 西部事業部 事業部長兼 大阪営業所 所長 平成24年7月 近畿・九州統括部 統括部長兼 大阪営業所 所長 平成26年4月 近畿・九州統括部 統括部長 平成27年4月 東海・北陸統括部 統括部長 平成28年11月 西日本事業部 特命部長 平成30年2月 執行役員 西日本担当 令和元年6月 取締役就任 西日本担当 令和2年10月 取締役 西日本事業部長 令和4年10月 取締役 西日本事業部長 中日本担当 令和5年6月 取締役 西日本事業部長(現任)	(注)3	8,000
取締役 神奈川事業部長	陶山 五彦	昭和55年5月5日生	平成20年3月 当社入社 平成26年5月 関東・東北統括部 統括部長代理 兼 東京営業所長 平成28年11月 東日本事業部 特命部長 平成30年2月 執行役員 東日本担当 平成30年6月 執行役員 神奈川担当 令和2年10月 執行役員 神奈川事業部長 令和4年6月 取締役就任 神奈川事業部長(現任)	(注)3	700

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	及川 善雅	昭和33年 1月27日生	昭和54年 7月 有限会社五善商事入社 平成 3年 6月 株式会社コスモ測量入社 平成 4年 9月 株式会社コスモトレーディング 入社 平成10年 4月 株式会社プレス設立 代表取締役(現任) 平成27年 6月 当社取締役就任(現任)	(注) 3	9,400
取締役	池田 由美子	昭和50年 9月 9日生	平成10年 4月 テルモ株式会社入社 平成19年12月 EY新日本有限責任監査法人入社 令和 3年 9月 池田公認会計士事務所開設 (現任) 令和 4年 6月 当社取締役就任(現任) 令和 7年 6月 横浜州市庁舎商業施設運営事業者 選定評価委員会委員(現任)	(注) 3	1,400
常勤監査役	石樽 享司	昭和32年 4月10日生	昭和55年 4月 株式会社メイテックグループ ホールディングス入社 平成 7年10月 当社入社 平成13年 9月 神奈川事業部長兼 新横浜テクノセンター長 平成15年 6月 取締役就任 神奈川事業部長兼 新横浜テクノセンター長 平成16年 2月 取締役神奈川事業部長 平成16年 6月 取締役人事部長 平成16年 7月 取締役東部事業部長兼 東京営業所長 平成17年11月 取締役東部事業部長 平成18年 2月 取締役総務部長兼人事部担当 平成19年 3月 取締役総務部長兼 人事部・人材開発部担当 平成19年10月 取締役総務部長兼人事部担当 平成21年12月 取締役総務部長兼人事部長 平成23年 2月 取締役人事部長 平成25年 2月 取締役人事部長兼総務部長 平成26年 1月 取締役人事部長兼総務担当 平成29年12月 取締役人事部長 平成30年 6月 常勤監査役就任(現任)	(注) 4	31,500
監査役	佐藤 正八郎	昭和20年11月29日生	昭和39年 3月 警視庁入庁 平成 7年 3月 警視庁警部 平成15年 9月 葛飾警察署刑事組織犯罪対策課長 平成17年 3月 警視庁警視 平成18年 4月 千葉銀行株式会社入社 平成24年 3月 当社顧問(非常勤) 平成26年 6月 当社監査役就任(現任)	(注) 4	3,600
監査役	前田 泰志	昭和45年 5月28日生	平成14年10月 弁護士登録 平成22年11月 前田綜合法律事務所開設(現任) 平成27年 3月 税理士登録 前田泰志税理士事務所開設 (現任) 令和 4年 6月 当社監査役就任(現任)	(注) 4	2,400
計					104,800

- (注) 1. 取締役 及川善雅及び池田由美子は、社外取締役であります。  
2. 監査役 佐藤正八郎及び前田泰志は、社外監査役であります。  
3. 令和 6年 6月27日開催の定時株主総会の終結の時から 2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時まで。  
4. 令和 4年 6月29日開催の定時株主総会の終結の時から 4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時まで。  
5. 当社では、業務運営機能の強化と迅速な意思決定のため執行役員制度を導入しております。提出日(令和 8年 6月19日)現在の執行役員は東日本事業部長 太田誠、経理部長 露木辰徳、中日本事業部担当兼新規開拓担当 高井秀樹、総務部長 東出貴智の 4名です。

6. 提出日（令和8年6月19日）現在、当社は法令に定める監査役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任しております。補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数（株）
加藤 丈尚	昭和52年3月2日生	平成16年2月 加藤税務会計事務所入所 平成26年7月 上名古屋税理士法人入社（現任）	30,100

（注）補欠監査役の任期は、就任した時から退任した監査役の任期の満了の時までであります。

#### 社外役員の状況

当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名であります。

社外取締役 及川善雅は当社の株式を9,400株所有しておりますが、当社との間には人的関係及び取引関係その他の利害関係はありません。また、同氏は株式会社ブレスの代表取締役ですが、同社と当社との間には人的関係及び取引関係その他の利害関係はありません。社外取締役として経営陣から独立した視点に立ち、長年にわたる経営者としての豊富な経験に基づき、当社の監督と助言を行っていただくため、選任しております。

社外取締役 池田由美子は当社の株式を1,400株所有しておりますが、当社との間には人的関係及び取引関係その他の利害関係はありません。また、同氏は池田公認会計士事務所を開設しておりますが、同事務所と当社との間には人的関係及び取引関係その他の利害関係はありません。公認会計士としての豊富な経験と会計に関する専門の見地に基づく高い見識を活かし、実効性の高い監督を行っていただくため、選任しております。

社外監査役 佐藤正八郎は当社の株式を3,600株所有しておりますが、当社との間には人的関係及び取引関係その他の利害関係はありません。警察官としての経験・実績・見識を当社の監査体制に反映させ、コンプライアンス経営の強化を図っていただくため、選任しております。

社外監査役 前田泰志は当社の株式を2,400株所有しておりますが、当社との間には人的関係及び取引関係その他の利害関係はありません。また、同氏は前田綜合法律事務所及び前田泰志税理士事務所を開設しておりますが、同事務所と当社との間には人的関係及び取引関係その他の利害関係はありません。弁護士及び税理士としての高度な専門的知識を当社経営の監査に活かしていただくため、選任しております。

当社は、毎月開催される取締役会において経営上の重要事項についての意思決定、取締役の業務執行状況の監督を行っております。取締役会には社外取締役及び社外監査役が出席し、外部の目を通して中立的な立場から経営の意思決定及びその執行を監視、牽制しております。

また、当社は、社外取締役又は社外監査役を選任するための提出会社からの独立性に関する基準は定めておりませんが、選任にあたりましては、候補者が株主の皆様と利益相反するおそれがない事を重要視しております。社外取締役及び社外監査役各氏は、当社経営陣から独立した客観的な立場から公正な判断ができる人物であり、社外役員としての職務遂行に必要な独立性が確保できていると判断しており、選任状況は適切であると考えております。

#### 社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役及び社外監査役は、取締役会において会計監査人の監査結果及び内部監査を含む内部統制の整備、運用状況、評価結果等について内部統制部門より定期的に報告を受け、必要に応じて独立的な立場から助言を行っております。内部監査部門は年1回、年間を通じた監査の結果を取締役会で報告し内容について議論を行っております。通常、取締役会には社外監査役を含む監査役全員が出席しており同時に結果が報告され、必要に応じて改善を指示し、是正措置が講じられる体制となっております。また、常勤監査役が会計監査人と必要に応じて会合を持ち、監査結果等の情報交換が行われ、監査役会において常勤監査役から社外監査役に情報共有され、相互に連携しながら監査が行われております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

提出日(令和8年6月19日)現在、当社の監査役会は、常勤監査役1名、非常勤監査役(社外監査役)2名の計3名で構成し、監査の方針、監査計画を策定し、監査役会規則に基づき、公正な監査を実施しております。なお、監査役会の招集、運営に関する事務に専任のスタッフは配置していません。監査役監査の手続きは会計監査及び業務監査の結果、要改善事項が検出された場合には、監査役間での意見交換の後、取締役会で改善勧告を行うこととしております。

監査役は、全ての取締役会へ出席し、会計監査及び業務監査を中心として、経営全般に関する監査を行う体制を構築しております。又、内部監査責任者及び監査法人とも相互連携(意見交換)等を行い経営に対する監視の強化と取締役への適宜助言を行っております。

監査役会は隔月に1回開催しており、必要に応じて随時開催しております。個々の監査役の出席状況は次のとおりであります。

氏名	開催回数	出席回数
石樽 享司	8	8
佐藤 正八郎	8	8
前田 泰志	8	8

具体的な検討内容は監査の方針、監査計画、事業報告、計算書類、会計監査人の評価および再任・不再任、監査報告書案、事業部門監査結果、内部統制システム監査結果となっております。

常勤監査役は、上期事業部門監査として9営業所を往査実施、下期事業部門監査として4事業部を往査実施、内部統制システム監査として本社管理部門の監査を実施、各部門長と意見交換を行い、課題に向けた提言を行っております。各監査結果を取り纏め、監査報告書を作成し監査役会及び取締役会で監査結果の報告を行っております。

内部監査の状況

内部監査は、内部監査室長1名が担当し、内部監査規程、監査項目チェックシートに基づき業務全般にわたり年2回定期的に内部監査を実施しております。内部監査は、各部門を対象とした内部監査計画書を策定し、各部門の業務活動が法令、会社の諸規程等に則り遂行されているか検証し、経営方針との整合性、経営効率の妥当性の面から監査し、業務改善、効率的向上のための必要な助言を行っております。

(内部監査、監査役監査及び会計監査の相互連携、これらの監査と内部統制部門の関係)

常勤監査役は内部監査室長及び監査法人と適宜会合を持ち監査結果等の情報交換を行っております。取締役会では内部統制担当執行役員から定期的に報告があり、監査役は整備運用状況を確認しております。内部監査室長は内部統制定例会で監査結果の報告を行い、監査法人は結果の確認を行っております。内部監査室長、監査役及び監査法人とも相互連携(意見交換)等を行い経営に対する監視の強化と取締役への助言を適宜行っております。

(内部監査の実効性を確保するための取り組み)

内部監査部門は年1回、年間を通じた監査の結果を取締役会で報告し内容について議論を行っております。通常、取締役会には監査役全員が出席しており同時に結果が報告され、必要に応じて改善を指示し、是正措置が講じられる体制となっております。また、内部統制定例会や事業部会においても内部監査の結果が報告されており、取締役会と連携をとっています。その他、内部監査室長は適宜、常勤監査役と情報交換を適宜行い、常勤監査役を通じて他の監査役に対しても情報共有がなされております。

会計監査の状況

イ．監査法人の名称

アーク有限責任監査法人

ロ．継続監査期間

4年間

ハ．業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員 高屋 友宏

指定有限責任社員 業務執行社員 長崎 善道

ニ．監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士3名、その他9名であります。

ホ．監査法人の選定方針と理由

監査法人の選定については、監査役会において「会計監査人の選定基準策定に関する実務指針」（日本監査役協会）の選定基準に従い、監査法人としての品質管理体制、会社法の欠格事由に該当しないこと、独立性、実施体制及び監査報酬等を総合的に検討し判断しております。

なお、会計監査人の解任又は不再任については、監査役会が、会計監査人の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合は、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定いたします。

また、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合は、監査役全員の同意に基づき、会計監査人を解任いたします。この場合、監査役会が選定した監査役は、解任後最初に招集される株主総会において、会計監査人を解任した旨及び解任の理由を報告いたします。

ヘ．監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社の監査役及び監査役会は、監査法人の評価にあたり「会計監査人の評価基準に関する実務指針」（日本監査役協会）の評価基準に従い、監査法人としての品質管理体制、監査チームの独立性並びに専門性、監査報酬、監査役並びに経営者とのコミュニケーション状況等を総合的に検討した結果、相当であると判断いたしました。

監査報酬の内容等

イ．監査公認会計士等に対する報酬

(単位：千円)

前事業年度		当事業年度	
監査証明業務に基づく報酬	非監査業務に基づく報酬	監査証明業務に基づく報酬	非監査業務に基づく報酬
18,000	-	18,000	-

ロ．監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬（イ．を除く）

該当事項はありません。

ハ．その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

二．監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬は、当社の規模や複雑性・リスク等を含む特性及び予想される監査業務の日数、関係する人員数等を総合的に勘案し、会計監査人と協議の上、監査役会の同意を得て決定いたします。

ホ．監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社監査役会は、日本監査役協会が公表する「会計監査人との連携に関する実務指針」を踏まえ、監査項目別監査時間及び監査報酬の推移並びに過年度の監査計画と実績の状況を確認し、当事業年度の監査時間及び報酬額の見積りの妥当性を検討した結果、会計監査人の報酬等につき会社法第399条第1項の同意を行っております。

(4)【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社は、取締役会において、役員の個人別報酬等の内容に係る決定方針を決議しております。

また、取締役会は、当事業年度に係る取締役の個人別報酬等について、報酬等の内容の決定方法及び決定された報酬等の内容が取締役会で決議された決定方針及び役員規程の内容と整合していることを確認しており、当該決定方針に沿うものであると判断しております。

役員の個人別報酬等の内容に係る決定方針の内容は次のとおりです。

イ．基本方針

当社の役員報酬は、役員が永続的な企業価値の向上への意欲向上に機能するように会社の経営状況、世間水準を考慮して決定し、固定報酬と退職慰労金で構成する。

(固定報酬)

役員の固定報酬は、役職及び職責、従業員給与とのバランスを考慮して決定し、毎月定額を金銭で支給する。

取締役の固定報酬額は、株主総会が決定した報酬総額の限度内において取締役会で決定する。

監査役の固定報酬額は、株主総会が決定した報酬総額の限度内において監査役の協議で決定する。

当社の役員の固定報酬の額またはその算定方法の決定に関する方針は、当社役員規程に定められており、当該規程の決定権限は取締役会及び監査役会が有する。役員規程には報酬の基準額、役位毎の倍率及び支払い方法が定められており、内容を改定する場合には取締役会の決議及び監査役の協議が必要になる。

(退職慰労金)

退職慰労金は役員退任時に役員規程に定める基準額、役位別倍率、在任期間に従い算出する。

また、在任中特に功績が顕著であったと取締役会で認めた役員については役員規程に定めた基準額、役位別倍率に従い功労加算金を算出する。

退職慰労金、功労加算金は、その支給について退任取締役については取締役会の決議に、退任監査役については監査役の協議に一任する旨が株主総会で決議されたのち取締役会決議または監査役の協議を経て退任時に一時金として支給する。

ロ．基本報酬の個人別の報酬等の額の決定に関する方針

当社の取締役の報酬額は、株主総会で承認を得た範囲内で、取締役会に於いて一任決議を受けた代表取締役が担当役員作成の原案を基に、個々の取締役の役位、責務に相応しい水準を考慮し、担当部門の当期・中長期の企業価値向上への貢献度を総合的に勘案して決定する。

監査役の報酬額は、株主総会で承認を得た範囲内で、監査役の協議によって決定する。

当社の取締役の報酬等に関する株主総会の決議年月日は平成18年6月29日であり、決議の内容は、経済情勢の変化および取締役の増員等諸般の事情を考慮して、取締役の報酬額を年額150,000千円以内に改定するものであります。なお、取締役の報酬額には使用人兼務取締役の使用人分の給与は含んでおりません。また、当該定めに係る取締役の員数は5名でありました。

当社の監査役の報酬等に関する株主総会の決議年月日は平成17年2月8日であり、決議の内容は、監査体制の強化その他諸般の事情を勘案し、監査役の報酬を年額12,000千円以内に改定するものであります。また、当該定めに係る監査役の員数は2名でありました。

なお、当事業年度における当社の取締役の報酬額は、株主総会で承認を得た範囲内で、取締役会において一任決議を受けた代表取締役田中伸明が担当執行役員が作成した原案を基に、個別の取締役の報酬額について個々の取締役の役位、責務に相応しい水準を考慮し、担当部門の当期・中長期の企業価値向上への貢献度を総合的に勘案して決定しております。代表取締役社長に委任した理由は、当社を取り巻く環境、経営状況等を最も熟知し、総合的に取締役の報酬額を決定できると判断したためであります。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)				対象となる役員 の員数 (名)
		固定報酬	業績連動報酬	退職慰労金	左記のうち、 非金銭報酬等	
取締役 (社外取締役を除く)	23,722	20,631	-	3,091	-	4
監査役 (社外監査役を除く)	6,554	6,242	-	312	-	1
社外役員	7,751	7,222	-	529	-	4

役員ごとの報酬等の総額等

報酬等の総額が100,000千円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの

該当事項はありません。

( 5 ) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式とは、株式価格の上昇や配当金の受領による利益確保を目的に保有する投資株式と考えます。それ以外の取引関係強化等の事由による場合は純投資目的以外の保有と考えます。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

イ．保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会における検証の内容

該当事項はありません。

ロ．銘柄数及び貸借対照表計上額

該当事項はありません。

( 当事業年度において株式数が増加した銘柄 )

該当事項はありません。

( 当事業年度において株式数が減少した銘柄 )

該当事項はありません。

ハ．特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

該当事項はありません。

保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

## 5【従業員の状況等】

### (1)【人材戦略に関する基本方針等】

当社の主要事業である技術サービス事業の中心となるのは人材です。経営戦略で実施している技術者価値の向上を目指していくうえで、人材と働く環境の質を高めていくことが重要です。キャリア形成支援企業として、人材の採用、育成、働く環境の整備に継続的に取り組んでまいります。

事業の拡大や社会貢献を広めていくためには、人材の確保が必要です。そのために、新卒及び中途採用と働く環境の整備に取り組んでいます。当社のビジョン「社員一人ひとりが、イノベーションの起点になる。」の実現にむけて、必要な価値観としてバリュー「プロフェッショナル、リスペクト、コミュニケーション、アップデート」を定めています。技術力のみならず人間力を備え、当社の目指す未来や価値観に共感いただける人材の採用を進めてまいります。

人材の育成においては、技術者価値を高めプロの技術者として成長を目指す教育に力を入れています。経験豊富な講師による社会人研修や、開発の第一線で活躍してきた技術者が行う長期的な視点での成長を見据えた技術者の基盤の確立に重点を置いた技術教育、経験年数に応じた段階別研修、オンライン研修やリーダー研修を実施しています。社会へ貢献できるプロの技術者の育成に向けて、技術力だけでなく人間力の向上にも注力しています。加えて、幅広い業種の顧客に対し技術力を提供している強みを活かし、個々のキャリア形成に即した業務への転換を図るなど社員の能力向上に努めてまいります。

働く環境の整備においては、生涯技術者として安心して活躍していける体制作りを推進しています。キャリア形成を支援する教育体制に加え、社員の希望やお客様のニーズにお応えする拠点展開と受注の獲得、社員のエンゲージメントを高める情報共有体制の強化、時代に即した制度や仕組みのアップデートを行ってまいります。

また、従業員の給与その他の給付の額及び内容については、本人の経験・能力・成果や当社が大切にしている価値観に基づく行動の実践等を評価・処遇の基本とし、そこに会社の業績状況、社会情勢や外部環境等を総合的に勘案し決定しております。

(2) 【従業員の状況】  
提出会社の状況

令和8年3月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)	平均年間給与の 対前事業年度増減率 (%)
855	38.4	11.2	5,118	5.3

- (注) 1. 従業員数は就業人員であります。  
2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。  
3. 当社の報告セグメントは単一であるため、セグメント別の記載を省略しております。

労働組合の状況

労働組合は結成されておりませんが、労使関係は円満な状況であります。

管理的地位にある労働者に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の額の差異

当事業年度					補足説明
管理的地位にある労働者に占める女性労働者の割合(%) (注) 1	男性労働者の育児休業取得率(%) (注) 2	労働者の男女の賃金の額の差異(%) (注) 1			
		全労働者	うち正規雇用労働者	うちパート・有期労働者	
-	33.3	83.1	84.4	64.8	パート・有期労働者の区分には、定年再雇用で専門性の高い職種の男性が多く含まれていることにより差異が生じております。

- (注) 1. 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。  
2. 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の6第1号における育児休業等の取得割合を算出したものであります。

## 第5【経理の状況】

### 1. 財務諸表の作成方法について

当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）に基づいて作成しております。

### 2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、事業年度（令和7年4月1日から令和8年3月31日まで）の財務諸表について、アーク有限責任監査法人による監査を受けております。

### 3. 連結財務諸表について

当社は子会社がありませんので、連結財務諸表を作成していません。

### 4. 財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組について

当社は、財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組を行っております。具体的には、公益財団法人財務会計基準機構へ加入しており、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての確に対応することができる体制を整備しております。

1【財務諸表等】  
(1)【財務諸表】  
【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (令和7年3月31日)	当事業年度 (令和8年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	3,432,998	3,076,749
電子記録債権	14,938	10,295
売掛金	733,640	806,612
貯蔵品	1,030	955
前払費用	66,251	62,631
その他	11,694	8,655
流動資産合計	4,260,553	3,965,899
固定資産		
有形固定資産		
建物	557,969	559,233
減価償却累計額	278,517	292,692
建物(純額)	279,451	266,540
構築物	6,677	7,062
減価償却累計額	6,239	6,397
構築物(純額)	437	665
工具、器具及び備品	38,857	39,500
減価償却累計額	30,825	34,877
工具、器具及び備品(純額)	8,031	4,623
土地	968,059	968,059
有形固定資産合計	1,255,981	1,239,889
無形固定資産		
ソフトウェア	4,979	427
その他	1,499	1,494
無形固定資産合計	6,479	1,921
投資その他の資産		
投資有価証券	-	100,000
長期前払費用	20	227
繰延税金資産	305,612	317,824
その他	77,807	78,474
貸倒引当金	1,800	3,067
投資その他の資産合計	381,639	493,459
固定資産合計	1,644,100	1,735,270
資産合計	5,904,654	5,701,169

(単位：千円)

	前事業年度 (令和7年3月31日)	当事業年度 (令和8年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	907	-
短期借入金	400,000	-
未払金	25,636	27,597
未払費用	400,154	412,188
未払法人税等	42,868	107,235
預り金	20,733	19,310
賞与引当金	431,897	440,292
その他	113,937	119,205
流動負債合計	1,436,135	1,125,829
固定負債		
退職給付引当金	473,107	478,966
役員退職慰労引当金	15,529	19,461
固定負債合計	488,636	498,428
負債合計	1,924,772	1,624,258
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	377,525	377,525
資本剰余金		
資本準備金	337,525	337,525
資本剰余金合計	337,525	337,525
利益剰余金		
その他利益剰余金		
別途積立金	150,000	150,000
繰越利益剰余金	3,216,761	3,439,713
利益剰余金合計	3,366,761	3,589,713
自己株式	101,928	227,851
株主資本合計	3,979,882	4,076,911
純資産合計	3,979,882	4,076,911
負債純資産合計	5,904,654	5,701,169

## 【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)	当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)
売上高	1 5,969,419	1 6,193,609
売上原価	4,634,797	4,823,037
売上総利益	1,334,622	1,370,572
販売費及び一般管理費		
役員報酬	38,806	34,096
給料及び賞与	333,216	351,444
賞与引当金繰入額	28,459	27,331
退職給付費用	3,823	2,526
役員退職慰労引当金繰入額	4,404	3,932
法定福利費	57,062	58,415
採用費	75,924	72,998
旅費及び交通費	12,019	18,657
支払手数料	55,329	56,637
地代家賃	37,951	38,269
減価償却費	13,848	11,007
その他	108,596	122,336
販売費及び一般管理費合計	769,441	797,654
営業利益	565,180	572,918
営業外収益		
受取利息	1,924	6,662
受取手数料	1,744	819
未払配当金除斥益	533	468
その他	433	997
営業外収益合計	4,634	8,949
営業外費用		
支払利息	5,018	811
支払手数料	127	651
寄付金	129	36
その他	126	140
営業外費用合計	5,400	1,639
経常利益	564,414	580,228
特別損失		
固定資産除却損	2 0	2 -
特別損失合計	0	-
税引前当期純利益	564,414	580,228
法人税、住民税及び事業税	130,337	159,687
法人税等調整額	20,407	12,212
法人税等合計	150,745	147,475
当期純利益	413,669	432,752

売上原価明細書

区分	注記 番号	前事業年度 (自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)		当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
労務費	1	4,560,530	98.4	4,751,793	98.5
経費	2	73,854	1.6	71,244	1.5
当期総費用		4,634,384	100.0	4,823,037	100.0
期首仕掛品棚卸高		412		-	
合計		4,634,797		4,823,037	
期末仕掛品棚卸高		-		-	
当期売上原価		4,634,797		4,823,037	

原価計算の方法

原価計算の方法は、実際原価に基づく個別原価計算を採用しております。

(注) 1 労務費に含まれている引当金繰入額は、次のとおりであります。

項目	前事業年度 (自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)	当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)
賞与引当金繰入額(千円)	403,438	412,961
退職給付費用(千円)	38,181	25,103

2 経費の主な内訳は、次のとおりであります。

項目	前事業年度 (自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)	当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)
旅費交通費(千円)	9,891	15,680
減価償却費(千円)	11,192	11,934

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日）

(単位：千円)

	株主資本								純資産合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			自己株式	株主資本合計	
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金		利益剰余金合計			
				別途積立金	繰越利益剰余金				
当期首残高	377,525	337,525	337,525	150,000	2,999,602	3,149,602	54,081	3,810,570	3,810,570
当期変動額									
剰余金の配当					196,510	196,510		196,510	196,510
当期純利益					413,669	413,669		413,669	413,669
自己株式の取得							47,846	47,846	47,846
当期変動額合計	-	-	-	-	217,159	217,159	47,846	169,312	169,312
当期末残高	377,525	337,525	337,525	150,000	3,216,761	3,366,761	101,928	3,979,882	3,979,882

当事業年度（自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日）

(単位：千円)

	株主資本								純資産合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			自己株式	株主資本合計	
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金		利益剰余金合計			
				別途積立金	繰越利益剰余金				
当期首残高	377,525	337,525	337,525	150,000	3,216,761	3,366,761	101,928	3,979,882	3,979,882
当期変動額									
剰余金の配当					209,800	209,800		209,800	209,800
当期純利益					432,752	432,752		432,752	432,752
自己株式の取得							125,922	125,922	125,922
当期変動額合計	-	-	-	-	222,952	222,952	125,922	97,029	97,029
当期末残高	377,525	337,525	337,525	150,000	3,439,713	3,589,713	227,851	4,076,911	4,076,911

【キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)	当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税引前当期純利益	564,414	580,228
減価償却費	25,041	22,942
貸倒引当金の増減額(は減少)	-	1,267
賞与引当金の増減額(は減少)	116,124	8,395
退職給付引当金の増減額(は減少)	20,706	5,858
役員退職慰労引当金の増減額(は減少)	229,898	3,932
受取利息及び受取配当金	1,924	6,662
支払利息	5,018	811
支払手数料	127	651
固定資産除却損	0	-
売上債権の増減額(は増加)	29,686	68,329
棚卸資産の増減額(は増加)	491	75
前払費用の増減額(は増加)	10,859	3,210
長期前払費用の増減額(は増加)	44	207
その他の資産の増減額(は増加)	2,738	2,372
預り金の増減額(は減少)	45,190	1,423
未払費用の増減額(は減少)	28,683	12,033
未払金の増減額(は減少)	45,063	3,647
その他の負債の増減額(は減少)	13,753	3,886
小計	409,043	572,689
利息及び配当金の受取額	1,924	6,662
利息の支払額	5,038	401
法人税等の支払額	188,389	95,598
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>	<b>217,540</b>	<b>483,352</b>
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
定期預金の預入による支出	-	500,000
長期預金の預入による支出	50,000	-
有形固定資産の取得による支出	44,641	3,825
投資有価証券の取得による支出	-	100,000
無形固定資産の取得による支出	528	-
投資活動によるキャッシュ・フロー	95,169	603,825
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
短期借入金の純増減額(は減少)	200,000	400,000
自己株式の取得による支出	47,987	126,639
リース債務の返済による支出	667	-
配当金の支払額	196,244	209,136
財務活動によるキャッシュ・フロー	444,899	735,775
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	322,528	856,249
現金及び現金同等物の期首残高	3,755,526	3,432,998
現金及び現金同等物の期末残高	3,432,998	2,576,749

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 重要な資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券

満期保有目的の債券

原価法を採用しております。

(2) 棚卸資産

仕掛品

個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

定率法を採用しております。ただし、平成10年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 3年～50年

構築物 10年～40年

工具、器具及び備品 2年～10年

(2) 無形固定資産

定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における見込利用可能期間(5年)による定額法を採用しております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権その他これに準ずる債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、賞与支給見込額の当事業年度負担額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見込額に基づき計上しております。

退職給付引当金及び退職給付費用の処理方法は次のとおりであります。

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(5年)による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

(4) 役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に備えるため、当社役員規程に基づく期末要支給額を計上しております。

#### 4. 収益及び費用の計上基準

当社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務に係る収益を認識する通常の時点は次のとおりであります。

当社は、機械設計、電子設計、ソフト開発の技術者サービスによるアウトソーシング事業を行っております。

これらのサービスは、主として労働者派遣契約または請負契約に基づき行われ、労働者派遣契約は、一定の期間にわたり移転されるサービス、請負契約は、一時点で移転される財またはサービスとして判断しております。

労働者派遣契約による売上高は、顧客企業からの指揮命令を受けて行う技術者の役務提供により履行義務が充足され、履行義務の充足に係る進捗度に基づき収益を認識しております。また、進捗度の測定は、時の経過に基づき行っております。

請負契約による売上高は、顧客企業への成果物の納品及び検収により履行義務が充足され、顧客企業が検収した時点で収益を認識しております。

取引の対価は、履行義務を充足してから主として2か月以内に受領しており、重要な金融要素は含んでおりません。

#### 5. キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3か月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

#### 6. 未適用の会計基準等

(リースに関する会計基準等)

- ・「リースに関する会計基準」(企業会計基準第34号 令和6年9月13日 企業会計基準委員会)
- ・「リースに関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第33号 令和6年9月13日 企業会計基準委員会)等

##### (1) 概要

企業会計基準委員会において、日本基準を国際的に整合性のあるものとする取組みの一環として、借手の全てのリースについて資産及び負債を認識するリースに関する会計基準の開発に向けて、国際的な会計基準を踏まえた検討が行われ、基本的な方針として、IFRS第16号の単一の会計処理モデルを基礎とするものの、IFRS第16号の全ての定めを採り入れるのではなく、主要な定めのみを採り入れることにより、簡素で利便性が高く、かつ、IFRS第16号の定めを個別財務諸表に用いても、基本的に修正が不要となることを目指したリース会計基準等が公表されました。

借手の会計処理として、借手のリースの費用配分の方法については、IFRS第16号と同様に、リースがファイナンス・リースであるかオペレーティング・リースであるかにかかわらず、全てのリースについて使用権資産に係る減価償却費及びリース負債に係る利息相当額を計上する単一の会計処理モデルが適用されます。

##### (2) 適用予定日

令和10年3月期の期首より適用予定であります。

##### (3) 当該会計基準等の適用による影響

「リースに関する会計基準」等の適用による財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であり、ます。

(後発事象に関する会計基準等)

- ・「後発事象に関する会計基準」(企業会計基準第41号 令和8年1月9日 企業会計基準委員会)
- ・「後発事象に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第35号 令和8年1月9日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

「後発事象に関する会計基準」等は、後発事象の定義、会計処理及び開示等を取り扱う包括的な会計基準を設定することを優先的な課題とし、日本公認会計士協会 監査・保証基準委員会 監査基準報告書560実務指針第1号「後発事象に関する監査上の取扱い」で示されている会計に関する内容を原則として踏襲して企業会計基準委員会に移管することを基本的な方針として、表現の見直し及び後発事象の評価期間の整理を行うとともに、財務諸表の公表の承認に関する注記を新たに求める等、後発事象に関する会計処理及び開示について定めたものであります。

(2) 適用予定日

令和10年3月期の期首より適用予定であります。

(表示方法の変更)

(損益計算書)

前事業年度において、「営業外費用」の「その他」に含めていた「支払手数料」は、金額的重要性が増したため、当事業年度より区分掲記しております。

なお、前事業年度の「支払手数料」は127千円であります。

(貸借対照表関係)

顧客との契約から生じた債権及び契約資産の金額は、それぞれ次のとおりであります。

	前事業年度 (令和7年3月31日)	当事業年度 (令和8年3月31日)
電子記録債権	14,938千円	10,295千円
売掛金	669,587千円	736,086千円
契約資産	64,052千円	70,526千円

(損益計算書関係)

1 顧客との契約から生じる収益

売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載しておりません。顧客との契約から生じる収益の金額は、財務諸表「注記事項(収益認識関係)1.顧客との契約から生じる収益を分解した情報」に記載しております。

2 固定資産除却損の内容は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)	当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)
工具、器具及び備品	0千円	-

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首(株)	増加(株)	減少(株)	当事業年度末(株)
発行済株式				
普通株式	3,975,300	-	-	3,975,300
合計	3,975,300	-	-	3,975,300
自己株式				
普通株式(注)	45,099	45,010	-	90,109
合計	45,099	45,010	-	90,109

(注) 普通株式の自己株式の増加45,000株は、取締役会決議による自己株式の取得、また、10株は単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
令和6年6月27日 定時株主総会	普通株式	196,510	50	令和6年3月31日	令和6年6月28日

(2) 基準日が当事業年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌事業年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
令和7年6月27日 定時株主総会	普通株式	209,800	利益剰余金	54	令和7年3月31日	令和7年6月30日

当事業年度（自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首（株）	増加（株）	減少（株）	当事業年度末（株）
発行済株式				
普通株式	3,975,300	-	-	3,975,300
合計	3,975,300	-	-	3,975,300
自己株式				
普通株式（注）	90,109	80,000	-	170,109
合計	90,109	80,000	-	170,109

（注）普通株式の自己株式の増加80,000株は、取締役会決議による自己株式の取得による増加であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

（決議）	株式の種類	配当金の総額 （千円）	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
令和7年6月27日 定時株主総会	普通株式	209,800	54	令和7年3月31日	令和7年6月30日

(2) 基準日が当事業年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌事業年度となるもの

令和8年6月26日開催の定時株主総会の議案として、次のとおり付議する予定です。

（決議予定）	株式の種類	配当金の総額 （千円）	配当の原資	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
令和8年6月26日 定時株主総会	普通株式	266,363	利益剰余金	70	令和8年3月31日	令和8年6月29日

（注）1株当たり配当額70円には、創立30周年記念による記念配当15円を含んでおります。

(キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前事業年度 (自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)	当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)
現金及び預金勘定	3,432,998千円	3,076,749千円
預入期間が3か月を超える定期預金	-	500,000千円
現金及び現金同等物	3,432,998千円	2,576,749千円

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は、設備投資計画、資金繰り計画に照らして、必要な資金は原則として自己資金で賄い、必要に応じ金融機関から借り入れております。一時的な余資は主に流動性の高い金融資産で運用しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当社の財務状況に重要な影響を与えられとされる金融商品は、現金及び預金、電子記録債権、売掛金であります。営業債権である電子記録債権及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。投資有価証券は満期保有目的の債券であり、格付の高い債券のみを対象としているため、信用リスクは僅少であります。借入金は、運転資金目的及び設備投資目的によるものでありますが、償還日は最長で決算日後1年以内であります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

当社は、営業債権について、各営業所が取引先の状況を定期的モニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。

資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

適時に資金繰り計画を作成・更新するとともに、手元流動性の維持などにより流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

前事業年度

該当事項はありません。

なお、「現金及び預金」、「電子記録債権」、「売掛金」、「短期借入金」については、現金であること、または短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似するものであることから、記載を省略しております。

市場価格のない株式等の貸借対照表計上額

該当事項はありません。

当事業年度

令和8年3月31日における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

区分	貸借対照表計上額 (千円)	時価(千円)	差額(千円)
投資有価証券			
満期保有目的の債券	100,000	99,200	800
資産計	100,000	99,200	800

(注)「現金及び預金」、「電子記録債権」、「売掛金」については、現金であること、または短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似するものであることから、記載を省略しております。

市場価格のない株式等の貸借対照表計上額

該当事項はありません。

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価で貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品  
前事業年度（令和7年3月31日）  
該当事項はありません。

当事業年度（令和8年3月31日）

区分	時価（千円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券				
満期保有目的の債券	-	99,200	-	99,200
資産計	-	99,200	-	99,200

（注）時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

満期保有目的の債券は取引金融機関から提示された価格によっており、活発な市場における相場価格とは認められないため、その時価をレベル2の時価に分類しております。

4. 金銭債権の決算日後の償還予定額  
前事業年度（令和7年3月31日）

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金及び預金（千円）	3,432,998	-	-	-
電子記録債権（千円）	14,938	-	-	-
売掛金（千円）	733,640	-	-	-
投資有価証券				
満期保有目的の債券（千円）	-	-	-	-
合計	4,181,576	-	-	-

当事業年度（令和8年3月31日）

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金及び預金（千円）	3,076,749	-	-	-
電子記録債権（千円）	10,295	-	-	-
売掛金（千円）	806,612	-	-	-
投資有価証券				
満期保有目的の債券（千円）	-	100,000	-	-
合計	3,893,657	100,000	-	-

5. 借入金の決算日後の返済予定額  
前事業年度（令和7年3月31日）

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短期借入金（千円）	400,000	-	-	-	-	-
合計	400,000	-	-	-	-	-

当事業年度（令和8年3月31日）

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、従業員の退職給付に充てるため、確定給付型の制度として退職一時金制度を採用しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前事業年度 (自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)	当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)
退職給付債務の期首残高	477,860千円	418,902千円
勤務費用	34,841 "	29,505 "
利息費用	1,156 "	7,117 "
数理計算上の差異の発生額	73,657 "	37,092 "
退職給付の支払額	21,298 "	21,770 "
退職給付債務の期末残高	418,902 "	396,661 "

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

該当事項はありません。

(3) 退職給付債務の期末残高と貸借対照表に計上された退職給付引当金の調整表

	前事業年度 (令和7年3月31日)	当事業年度 (令和8年3月31日)
非積立型制度の退職給付債務	418,902千円	396,661千円
未積立退職給付債務	418,902 "	396,661 "
未認識数理計算上の差異	54,205 "	82,305 "
貸借対照表に計上された負債と資産の純額	473,107 "	478,966 "
退職給付引当金	473,107 "	478,966 "
貸借対照表に計上された負債と資産の純額	473,107 "	478,966 "

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前事業年度 (自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)	当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)
勤務費用	34,841千円	29,505千円
利息費用	1,156 "	7,117 "
数理計算上の差異の費用処理額	6,007 "	8,992 "
確定給付制度に係る退職給付費用	42,005 "	27,629 "

(5) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前事業年度 (令和7年3月31日)	当事業年度 (令和8年3月31日)
割引率	1.7%	2.6%

(注) 予定昇給率については、令和6年3月31日を基準日として算定した年齢別昇給指数を使用しております。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (令和7年3月31日)	当事業年度 (令和8年3月31日)
繰延税金資産		
賞与引当金	129,741千円	136,226千円
賞与引当金法定福利費	18,416 "	19,560 "
退職給付引当金	146,379 "	148,192 "
役員退職慰労引当金	4,804 "	6,021 "
未払事業税	5,037 "	7,462 "
その他	6,779 "	7,125 "
繰延税金資産小計	311,160千円	324,588千円
評価性引当額	5,548 "	6,764 "
繰延税金資産合計	305,612千円	317,824千円
繰延税金資産純額	305,612千円	317,824千円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (令和7年3月31日)	当事業年度 (令和8年3月31日)
法定実効税率 (調整)	30.0%	30.0%
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.5%	0.6%
住民税均等割	0.6%	0.6%
税率変更による期末繰延税金資産の増額修正	0.8%	0.8%
評価性引当額の増減	0.2%	0.2%
賃上げ促進税制適用	3.9%	4.8%
その他	1.6%	2.0%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	26.7%	25.4%

(資産除去債務関係)

前事業年度(自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)  
重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当事業年度(自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)  
重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(収益認識関係)

1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

前事業年度(自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)

(単位:千円)

アウトソーシング事業	
一定の期間にわたり移転されるサービス	5,215,127
一時点で移転される財またはサービス	754,292
顧客との契約から生じる収益	5,969,419
売上高	5,969,419

(注)単一セグメントであるため、セグメント別の収益の内訳は記載しておりません。

当事業年度(自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)

(単位:千円)

アウトソーシング事業	
一定の期間にわたり移転されるサービス	5,406,821
一時点で移転される財またはサービス	786,788
顧客との契約から生じる収益	6,193,609
売上高	6,193,609

(注)単一セグメントであるため、セグメント別の収益の内訳は記載しておりません。

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

収益を理解するための基礎となる情報は、「(重要な会計方針)4. 収益及び費用の計上基準」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

3. 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当事業年度末において存在する顧客との契約から翌事業年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

(1) 契約資産の残高

(単位:千円)

	前事業年度	当事業年度
顧客との契約から生じた債権(期首残高)	659,706	684,526
顧客との契約から生じた債権(期末残高)	684,526	746,381
契約資産(期首残高)	59,185	64,052
契約資産(期末残高)	64,052	70,526

契約資産は、主に顧客との労働者派遣契約及び請負契約について期末日時点で完了しているが未請求の顧客企業への技術者の役務提供及び成果物の納品に係る対価に対する当社の権利に関するものであります。契約資産は、対価に対する当社の権利が無条件になった時点で顧客との契約から生じた債権に振り替えられます。当該労働者派遣契約及び請負契約に関する対価は、顧客企業への履行義務の充足に係る進捗度及び成果物の検収に従い、顧客からの検収情報に基づき請求し、主として2か月以内に受領しております。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当社は、個別の予想契約期間が1年を超える重要な取引はありません。また、顧客との契約から生じる対価の中に、取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社は、「アウトソーシング事業」の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前事業年度(自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

当事業年度(自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前事業年度 (自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)	当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)
1株当たり純資産額	1,024.37円	1,071.41円
1株当たり当期純利益	105.73円	112.03円

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前事業年度 (自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日)	当事業年度 (自 令和7年4月1日 至 令和8年3月31日)
当期純利益(千円)	413,669	432,752
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-
普通株式に係る当期純利益(千円)	413,669	432,752
普通株式の期中平均株式数(株)	3,912,438	3,862,946

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高	当期末減価償却累計額 又は償却累計額	当期償却額	差引当期末残高
有形固定資産							
建物	557,969	1,264	-	559,233	292,692	14,175	266,540
構築物	6,677	385	-	7,062	6,397	157	665
工具、器具及び備品	38,857	643	-	39,500	34,877	4,051	4,623
土地	968,059	-	-	968,059	-	-	968,059
有形固定資産計	1,571,563	2,292	-	1,573,856	333,966	18,384	1,239,889
無形固定資産							
ソフトウェア	-	-	-	38,523	38,096	4,552	427
その他	-	-	-	2,018	523	5	1,494
無形固定資産計	-	-	-	40,542	38,620	4,557	1,921
長期前払費用	20	207	-	227	-	-	227

(注) 1. 建物の増加は社員寮改修工事によるものであります。

2. 構築物の増加は本社ビル附属設備工事によるものであります。

3. 工具、器具及び備品の増加は本社備品及び研修用備品購入などによるものであります。

4. 無形固定資産の金額が資産総額の1%以下であるため「当期首残高」、「当期増加額」及び「当期減少額」の記載を省略しています。

5. 長期前払費用は、費用の期間配分に係るものであり、償却資産とは性格が異なるため、「当期末減価償却累計額又は償却累計額」及び「当期償却額」には含めておりません。

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	400,000	-	-	-
1年以内に返済予定の長期借入金	-	-	-	-
1年以内に返済予定のリース債務	-	-	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	-	-	-	-
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	-	-	-	-
その他有利子負債	-	-	-	-
合計	400,000	-	-	-

(注) 期末時点ですべて返済しているため「平均利率」については記載しておりません。

【引当金明細表】

(単位：千円)

区分	当期首残高	当期増加額	当期減少額 (目的使用)	当期減少額 (その他)	当期末残高
貸倒引当金	1,800	1,267	-	-	3,067
賞与引当金	431,897	440,292	431,897	-	440,292
役員退職慰労引当金	15,529	3,932	-	-	19,461

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2)【主な資産及び負債の内容】

資産の部

イ．現金及び預金

区分	金額(千円)
現金	1,564
預金	
普通預金	2,072,400
別段預金	2,784
定期預金	1,000,000
小計	3,075,184
合計	3,076,749

ロ．売掛金

相手先別内訳

相手先	金額(千円)
トヨタ自動車株式会社	96,234
いすゞ自動車株式会社	27,914
三菱電機ソフトウェア株式会社	19,631
Sky株式会社	19,044
ソニーグローバルマニュファクチャリング&オペレーションズ株式会社	18,983
その他	624,804
合計	806,612

売掛金の発生及び回収並びに滞留状況

当期首残高 (千円)	当期発生高 (千円)	当期回収高 (千円)	当期末残高 (千円)	回収率(%)	滞留期間(日)
(A)	(B)	(C)	(D)	$\frac{(C)}{(A) + (B)} \times 100$	$\frac{(A) + (D)}{2} - \frac{(B)}{365}$
733,640	6,812,969	6,739,996	806,612	89.3	41

(注) 上記金額には消費税等が含まれております。

ハ．貯蔵品

品目	金額(千円)
金券類	395
社章	559
合計	955

二．繰延税金資産

繰延税金資産は、317,824千円であり、その内容については「1 財務諸表等 (1) 財務諸表 注記事項 (税効果会計関係)」に記載しております。

負債の部

イ．未払費用

区分	金額(千円)
給与	298,318
社会保険料	105,712
その他	8,157
合計	412,188

ロ．退職給付引当金

退職給付引当金は、478,966千円であり、その内容については「1 財務諸表等 (1) 財務諸表 注記事項 (退職給付関係)」に記載しております。

(3) 【その他】

当事業年度における半期情報等

	中間会計期間	当事業年度
売上高 (千円)	3,078,473	6,193,609
税引前 中間(当期)純利益 (千円)	263,998	580,228
中間(当期)純利益 (千円)	181,074	432,752
1株当たり 中間(当期)純利益 (円)	46.61	112.03

## 第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取手数料	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部 (特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 - 無料
公告掲載方法	当会社の公告方法は電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載する方法で行う。 公告掲載URL <a href="https://www.hip-pro.co.jp/">https://www.hip-pro.co.jp/</a>
株主に対する特典	-

(注) 当社定款の定めにより、当社の単元未満株式を有する株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を有しておりません。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 取得請求権付株式の取得を請求する権利
- (3) 募集株式または募集新株予約権の割当てを受ける権利

## 第7【提出会社の参考情報】

### 1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

### 2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

#### (1)有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第30期）（自 令和6年4月1日 至 令和7年3月31日）令和7年6月26日関東財務局長に提出

#### (2)内部統制報告書及びその添付書類

令和7年6月26日関東財務局長に提出

#### (3)半期報告書及び確認書

（第31期中）（自 令和7年4月1日 至 令和7年9月30日）令和7年11月5日関東財務局長に提出

#### (4)臨時報告書

令和7年6月30日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

#### (5)自己株券買付状況報告書

報告期間（自 令和7年11月6日 至 令和7年11月30日）令和7年12月3日関東財務局長に提出

報告期間（自 令和7年12月1日 至 令和7年12月31日）令和8年1月6日関東財務局長に提出

報告期間（自 令和8年1月1日 至 令和8年1月31日）令和8年2月3日関東財務局長に提出

報告期間（自 令和8年2月1日 至 令和8年2月28日）令和8年3月3日関東財務局長に提出

報告期間（自 令和8年3月1日 至 令和8年3月31日）令和8年4月2日関東財務局長に提出

## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

令和8年6月19日

株式会社ヒップ

取締役会 御中

アーク有限責任監査法人

東京オフィス

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 高屋友宏

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 長崎善道

< 財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社ヒップの令和7年4月1日から令和8年3月31日までの第31期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社ヒップの令和8年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する事業年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

労働者派遣契約による売上高の正確性

監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>株式会社ヒップ（以下、「会社」という。）の売上高6,193,609千円のうち、一定の期間にわたり移転されるサービスに係る売上高は5,406,821千円であり、売上高全体の87%を占めている。</p> <p>「注記事項（重要な会計方針）4．収益及び費用の計上基準」に記載のとおり、労働者派遣契約による売上高は、顧客企業からの指揮命令を受けて行う技術者の役務提供により履行義務が充足され、履行義務の充足に係る進捗度に基づき収益を認識している。また、進捗度の測定は、時の経過に基づき行っている。</p> <p>労働者派遣契約による売上高の計上に当たっては、主に以下の理由から、売上高の計上を誤るリスクがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・技術者の技術水準等に基づき、契約単価や請求可能な労働時間について、技術者ごとに異なる条件で顧客と個別に契約していること</li> <li>・入力担当者が、総労働時間から契約条件に基づいて請求可能な労働時間を算定し、管理台帳に入力しており、その処理件数が膨大であること</li> </ul> <p>以上から、当監査法人は、労働者派遣契約による売上高の正確性に関する検討が、当事業年度の財務諸表監査において特に重要であり、監査上の主要な検討事項に該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、労働者派遣契約による売上高の正確性を検討するため、主として以下の手続を実施した。</p> <p>(1) 内部統制の評価 労働者派遣契約による売上高の計上プロセスに関連する内部統制について、整備及び運用状況の有効性を評価した。</p> <p>(2) 売上高の正確性の検討 労働者派遣契約による売上高が正確に計上されているかどうかを検討するため、以下の監査手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・統計的手法により抽出した取引について、契約単価が契約書等と一致していることを確かめるとともに、契約単価及び労働時間を管理台帳と照合し、会社が計上した売上高と一致していることを確認した。</li> <li>・統計的手法により抽出した顧客に対して実施した売掛金に係る残高確認について、回答を当監査法人が直接入手し、帳簿残高と照合した。</li> </ul>

#### その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、財務諸表及びその監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

#### 財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

## 財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

### < 内部統制監査 >

#### 監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社ヒップの令和8年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、株式会社ヒップが令和8年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定（社会的影響度の高い事業体の財務諸表監査に適用される規定を含む。）に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

#### 内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手するために、内部統制の監査を計画し実施する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指揮、監督及び査閲に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

#### <報酬関連情報>

当監査法人及び当監査法人と同一のネットワークに属する者に対する、会社の監査証明業務に基づく報酬及び非監査業務に基づく報酬の額は、「提出会社の状況」に含まれるコーポレート・ガバナンスの状況等(3)【監査の状況】に記載されている。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- 
- ( ) 1 . 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。  
2 . X B R L データは監査の対象には含まれていません。